「表裏頭脳　ケンイチ」

第２話「口裂け男の恐怖と確立の意思」

晶「みんな！今回は時間もない中、本当によく頑張ってくれた！部長として礼を言わせてもらうぞ！」

ここは閏台高校、演劇部の隣にあるメディア部の部室である。６月中旬、物理部で事件が起きてから１ヶ月ちょっとが経った今、メディア部では定期的に月一で発行している月刊の紙面発表とは別に、事件の中傷を防ぐ意味を込めて急遽制作に取り組んだ特別号の、いわゆる「お疲れ様会」をしていた。

鳩「しっかし、久しぶりじゃないか？校長先生から報道内容を褒めてもらえるなんて。」

晶「いえ、校長先生のお目にかかったこと自体が奇跡……って！何言わせるんですか！！」

鳩「いや、すまんすまん！」

晶「ったく……」

恥かしそうにも不機嫌そうな晶を見て部員たちは皆苦笑していたが、ふと孝彦が真面目に、思い出すように言う。

孝「でも、ホント今回の特別号は、あんな短時間でかいたなんて思えないできだったよな。」

隆「「物理部の悲劇！すべての元凶は金だった！！」！ネタがデカかっただけに、書きごたえもあるってもんだ！」

楽しそうにそう語る隆平や孝彦を見て、鳩谷は感心するように言う。

鳩「お前たちがちゃんと、寺尾先生が私利私欲のために犯行に及んだわけではないことをしっかり書いてくれたおかげか、あの記事の発表以来はおかしな噂も聞こえなくなったよ。…事件発生から記事の発表までの時間もかなり短かったしな。響鬼じゃないけど、本当によく頑張ってくれたよ。」

そんな鳩谷の話を聞いて、陽がすこし気まずそうに言う。

陽「でも、ちょっと複雑よね……確かに寺尾先生への誤解は防げそうだけど、なんだかメディア部の評判を上げるために特別号を書いたって感じも否めないし、人の死をこうやって記事にしちゃってよかったのかな？」

賢「そうだね……僕もなんだか、よくわからない……」

陽に賛同する賢一も、どこか気を落としている様子である。

路「何も、面白半分に記事を書いたわけじゃないだろ？大事なのは、寺尾先生の苦悩も理解しようとする気持ちと、篠原さんの死を無駄にしないことだと思うぜ？」

龍路の優しい口調に、陽も賢一も顔を上げた。

修「そうですよ。篠原さんのような被害者が二度と出ないよう、必要以上に先生を責める人を出さないよう、あの事件の真相を正しく皆さんに知ってもらう必要はあるはずですから。」

陽「そうね。…そうよね。それが私たち、メディア部の仕事だもんね！」

隆「それにしても賢一ぅ～、お前あの時はすごかったよな！」

そう言いながら、隆平は賢一の首に腕を回した。

賢「え？！」

海「そうそう！１人で事件を解決しちゃうんですもん！あの時のセンパイ、ちょっと怖かったけどすごかったです！」

賢「いや…あれは…」

孝「お前じゃないんだよなぁ…信じらんないけど。」

路「まあ、逆にあの性格で賢一だって言われても信じられないけどな。」

鳩「まったくだ。あの頭の良さは認めざるを得ないが、あの性格はお世辞にもいい性格とは言い難い。」

難しい顔でそんな話をする３人を見て、賢一は自信を失くすように言う。

賢「でも、彼の方が僕より優れてるのも事実ですし…」

鳩「あ、いや…別にそう言う意味で言ったわけじゃないんだが…」

陽「そうよ、ヨシくん。確かにケンイチくんはすごく頭がよかったけど、でも、ヨシくんはヨシくんでしょ？私はヨシくんがいてくれるだけで、いつも安心できるんだから。」

晶「陽の言うとおりだぞ、賢一。あの事件が解決した次の日、元に戻ったお前を見てどれだけホッとしたことか…」

賢「ひな…センパイ…」

路「それにしても、そのケンイチって言うのが、あの時の、頭キレッキレな賢一の名前なのか？」

陽「名前って言うか、その…ケンイチっていうのは、私が勝手につけてあげただけで…ほら、彼、ヨシくんの名前で呼ばれるの、嫌がってたでしょ？」

孝「そういや、言ってたな。「気安く賢一なんて呼ぶな」とかなんとか…」

隆「で、本人は気に入ってくれたのか？」

そう言われて、賢一と陽は不思議そうに顔を見合わせた。

陽「どう、だろう…」

鳩「どうだろうって、どういうことだ？」

陽「いえ、ケンイチって呼んだ時は怒られこそしなかったけど、勝手にしろって言ってすぐヨシくんに戻っちゃったし、あれ以来彼には会ってないから…」

修「会ってない？」

陽「うん。あれ以来、ヨシくんはずっとヨシくんのままなの。それはそれで、私は安心なんだけど。あ、別にケンイチくんが嫌とかじゃなくてね！」

修「はあ、そうなんですか。」

賢「……。彼が、ケンイチが表に出ていた時に何が起きているかとかは分かってたんだけど、彼が僕の中に戻った後は、何を思っているのか、何を感じてるのか…いや、それ以前に、今も僕の中にいてくれているのか、それがよくわからなくて…」

少し寂しそうにそう言う賢一を見て、佐武兄弟がひそひそと話し始める。

海「ねえ、賢一センパイ、なんか寂しそうじゃない？」

路「う～ん…言われてみれば…」

海「でもさあ、ケンイチさんが出てる時って賢一センパイは何にも出来ないじゃん。しかも、ケンイチさんって結構自分勝手だし…なのに寂しいとかってあるのかな？」

路「そんなん、わかんないよ。俺は多重人格じゃないし…」

そんな２人に、いつのまにか注目が集まっていた。

海「あ、あれ…？僕たち注目の的？」

隆「そりゃあな、そんなに堂々とひそひそ話されちゃあ、気になるだろ？」

路「さ、さすが地獄耳…」

隆「いや、俺じゃなくても気になるって…」

孝「しかし、結局ケンイチってのは何者なんだ？」

晶「やっぱり、アレか？多重人格ってやつなのか？」

修「いやぁ…多重人格ではないと思いますけど。」

晶「ほう、そりゃまたなんで？」

修「多重人格って言うのは、いつも出ている人格、つまり主人格ですね。それじゃない裏人格が体を支配している間の記憶が、主人格にはないんです。でも、賢一くんはケンイチくんが出ている間の事を覚えていますし、ケンイチくんも、賢一くんの見てきたことや聞いてきたことをちゃんとわかっていましたから。」

賢「僕の見てきたことや聞いてきたこと…？」

修「ほら、誰に教わったわけでもないのに、僕たちの名前なんか、普通に呼んでたでしょ？それに、実際に現場を見たのは賢一くんだったはずなのに、ケンイチくんはそれをしっかり覚えてましたから。」

鳩「そう言えば……。いきなり呼び捨てにされたのは驚いたが…」

孝「でも修丸、また話はふりだしに戻るが、結局ケンイチは何者なんだよ？」

修「いや、そこまでは僕にも…」

陽「そうなのよね、ケンイチくんにその質問した時もはぐらかされちゃったし、本人が教えてくれないんじゃ…ね？」

修「でも、僕感動しちゃいましたよ！多重人格でないとはいえ、賢一くんとケンイチくんの存在はまさにミステリー！そんな人が僕の後輩だなんて！」

賢「そんな、大げさですよ修丸センパイ…」

修「いいや！大げさなんかじゃありません！ねえ、陽さんもそう思うでしょ？！」

陽「え、えっと…っていうか、なんで私に振るの？」

修「だって、陽さんは賢一くんのお姉さんじゃないですか！」

陽「だからって…」

鳩「おいおい、落ち着けよ湯堂…」

修「何言ってるんです？！これが落ち着いていられますか！」

隆「無駄だって、先生。コイツのオカルトorミステリートークは誰にも止められませんから。」

孝「たく、ビビリな癖にオカルト好きとは、世も末だよ…」

海「確かにぃ～…」

修「べ、別に僕はビビリなんかじゃありませんよ…！それに、仮にビビリだとしてもオカルトが好きじゃいけませんか？」

路「ハハハ…」

皆が修丸に呆れかけたその空気の中、まるでその空気を壊そうとするように修丸がハッと言った。

修「あ、そうだ。オカルトと言えば、みなさんあの噂はご存知ですかね？」

晶「いきなりなんだよ？」

修「いえ、僕も実際に会ったわけじゃないので何とも言えないんですけど、最近、妙な噂が流れてて…」

晶「噂？」

修「ええ。」

そう言って、修丸はいっぺんに真剣な顔つきになる。

修「目撃談は、そのすべてが日もとっぷり暮れたころ…弊踊町３丁目の人通りの少ない路地なんかに……」

そこまで言って修丸は一息置き、自分で話していて怖くなってきたのか、軽く身震いをした。

修「出るんですよ…」

孝「だから、出るって何が？」

痺れを切らしてそう訊く孝彦に、修丸は勢いを増して言った。

修「口裂け男ですよ、口裂け男！」

孝「はあ？」

鳩「おい、それって口裂け女の間違いじゃないのか？……懐かしいなあ、俺が学生の頃、口裂け女が出るってすっごい噂になったもんだ。」

修「いえ、僕が聞いた噂ではとても大きなマスクをした、それこそ背も高い大男だって話です。まるで、それこそ口裂け女の男バージョンみたいだから、口裂け男って呼ばれてるらしくて。まあ、口裂け女と違うところと言えば、現れる時には必ず犬を連れてるそうなんですけど、口裂け男に気付かれると、その犬に追い掛け回されて、追いつかれると食い殺さてしまうとか…！」

そこまで熱く語る修丸に、晶はため息をついた。

晶「…でもよ、それって、タダの噂だろ？」

海「さあ、どうでしょうね？」

晶「ん？」

隆「おい龍海、なんか気になる言い方だな？」

海「いえね、僕のクラスメートなんかも、その口裂け男に出くわして、なんとか逃げ切れたみたいなんですけど、死ぬかと思ったって言ってましたから。」

孝「バカバカしい、何が口裂け男だ。」

海「え～、信じてないんですか？孝彦センパイ！」

孝「どうせ、散歩中の犬にちょっかい出しただけだろ？んで、マスクの方は飼い主がたまたま風邪ひいてただけとかさ。」

路「ハハ、相変わらずの現実主義だな、孝彦。」

隆「ちげーよ龍路、こーいうのはイシアタマっつうんだ。」

孝「誰がイシアタマだと？この能無し野郎！」

隆「能無し～？！バカ言うな！ちゃんと脳みそくらい入ってらあ！！」

孝「だったらスカスカなんじゃねーの？」

隆「この～…！言わせておけば―」

路「入ってるだけマシだ！…スカスカなら勉強でもして埋めりゃあいいだろ？」

隆「ま、まあそうだけど…」

龍路の一言に落ち着いた隆平を見て、龍海と晶が呆気にとられながらそれを見ていた。

海「兄ちゃん、ナイス…」

晶「まったく、お前の兄貴はできた男だな。」

海「いやぁ…」

晶「お前は褒めてない！」

呆れながら龍海にそう言った晶は、ふっと考え込む。

晶「でも、口裂け男か…ネタとしては十分おもしろそうだな。」

賢「え？！センパイ、口裂け男の記事書くんですか？！」

晶「あ、いや…まだ書くと決めたわけじゃないが―」

修「書きましょう！口裂け男！ぜひ！」

嬉しそうにそう言う修丸だったが、鳩谷がジトーっと呆れた視線を送って言う。

鳩「乗り気なところ悪いんだが、書くってことは実際に口裂け男と接触しなけりゃいけないってことだぞ？湯堂、そこんとこわかってるのか？」

修「え…？」

鳩谷の話を聞いて、修丸は一気に青ざめた。

修「センパイ、やっぱやめましょう。」

晶「……。お前って本当にビビリだな。」

修「ビ、ビビリなんかじゃありませんよ！」

隆「なら、臆病。」

修「いいえ！」

海「だったら怖がり？」

修「違います！」

陽「じゃあ…いくじなし！」

修「（ガーン！！！）」

心の中でショックを受けた修丸の悲痛な叫びが聞こえるはずもなく、嬉しそうにそう言った陽の一言に、部室は静まり返った。

陽「あ、あれ…みんなどうしたの？」

鳩「…じゃ、じゃあ俺は職員会議があるから、後は頼んだぞ響鬼。」

晶「は、はあ…」

そう言って逃げるように部室を出る鳩谷を部員全員がジトーっと見つめた後、部員たちはみな各々に思った。

陽「（先生まで…どうしちゃったのかな？）」

路「（先生…せめて修丸を慰めてからでもいいもんじゃないか…）」

修「（陽さんに、いくじなしと思われてたなんて…）」

賢「（ひな、たまに素でひどいことサラっと言うからなぁ…）」

孝「（陽、まさかとは思うが、ひどい事を言ったという自覚がないのか…？）」

海「（怖がりの方が１００倍マシだよ、ね？）」

隆「（俺の皮肉が、すごくかわいく思えて来たぜ…）」

晶「（この場は、どうしたものか…）……。さて、物理部の記事の反省、続きやるぞぉ。」

賢・隆・孝・路・海・修「は～い。」

陽「…？はーい！」

時刻は１８時過ぎ、メディア部の活動が終わってみな帰宅を始めたころ、修丸はふと、いつも通る通学路と、噂の弊踊町の境目で立ち止まった。

修「口裂け男、本当にいるのかな…」

好奇心と恐怖の入り混じったような声でふとそうつぶやくと、修丸はリュックの肩ひもをギュッと掴み、弊踊町の方へと歩を進めた。

修「思ったよりひっそりしてるなぁ…やっぱ、戻ろうかな…？」

弱気に独り言を言う修丸だったが、そんな独り言に応えるように、電灯がちらついて灯りだす。

修「うわっ！…びっくりしたぁ、街灯か…」

驚き、続いてホッとした修丸は、さらに続いて目に移った光景に思わず目を疑った。

修「え……」

そこには、大きなマスクをつけてサングラスをかけ、帽子を目深にかぶり、足にかかりそうなほどのロングコートを身に着けた大男が、まるで何かを待つかのように向こうを見て佇んでいた。男の側には、大きな犬が座り込んでいる。

修「（あ、あれってまさか…！）」

ハッとして街灯のついた電信柱に目をやった修丸は驚いた。

修「（さ、３丁目…！？）」

その時、修丸は今日の部活での一場面を思い出した。

―修「目撃談は、そのすべてが日もとっぷり暮れたころ…弊踊町３丁目の人通りの少ない路地なんかに……」―

修「（間違いない……口裂け男だ……）」

目線の先の男が何者かを理解した修丸は、思わず後ずさりを始めたが、その時に踏んだ砂利の音に大男が気づき、素早く修丸の方に振り向いた。

修「あ！」

その瞬間、大男が連れている犬が立ち上がり、低いうなり声を挙げながら修丸を睨みつけた。

修「い、イヤだ…」

そうつぶやきながら修丸が後ずさりした瞬間、犬が修丸に向かって走り出した。

修「うわぁ！！」

修丸は犬に背を向けて全力で来た道を走り始めた。

―修「口裂け男に気付かれると、その犬に追い掛け回されて、追いつかれると食い殺されてしまうとか……」―

修「（追いつかれたら…追いつかれたら殺される！）」

部活で言った言葉を思い出した修丸は、とにかく前だけ見て走り続けた。

修「あ！」

足もとも見ないで走っていた結果、修丸は石につまづいて思いっきり転んでしまった。

修「く、来るなぁ！」

上手く立ち上がることもできない修丸は、ただ必死にそう叫んで、今まで走ってきた方を振り向いた。

修「って、あれ？…いない？」

修丸が見た方向には、大男も犬も見当たらないどころか、人っ子１人いなかった。

修「逃げ切れた…のかな？」

それからも、修丸はしばらくの間腰が抜けて立ち上がれなかった。

隆・孝「口裂け男に会っただってー？！」

修「ハ、ハイ…！」

放課後のチャイムが鳴り響く中、見事に声を合わせて驚く隆平と孝彦だったが、言い終わってからお互いの顔をハッと見た。

海「わぁお、息ぴったり。」

賢「センパイ方って、もしかしてすごく仲いいんじゃないですか？」

隆・孝「んなわけあるか！」

またまた息ぴったりにそう言う２人に、修丸じゃなくとも賢一と龍海はビクついたあげく、龍海に至ってはいつものように泣きそうな顔をした。

賢「す、すいません！」

海「うぅ…兄ちゃあ～ん！！」

路「おーよしよし。…お前らさあ、俺の弟ビビらせてそんなに楽しいか？」

棒読みに続く呆れ口調の龍路に頭をなでられながら、龍海はいまだ泣いている。

海「うぅ…（泣）」

孝「龍路…龍海とお前のブラコン、なんとかならないのか？」

隆「ってか、それ以前にメディア部のビビリ担当は修丸って相場が決まってるだろ？」

修「ええ？！ぼ、僕はネタ集め担当なんですけど…」

晶「職務怠慢もいいとこだけどな…」

修「そ、そんなぁ…」

部長席に座って頬杖を突きながら、ボソッと言い放った晶に、修丸も先ほどの龍海のように泣きそうな顔をする。

陽「ね、ねえ？！それよりも、口裂け男に会ったって本当なの？」

気まずい空気をぶち壊すように、やや強引に話題を戻した陽に、修丸は半ベソ…といいよりはいつものオドオドした調子で、思い出したかのように陽の方を向き直した。

修「そ、そうなんです！昨日の帰り道、ちょっと気になって弊踊町の方を通ってみたんです。そしたら３丁目あたりに、犬を連れた、それこそ身長１８０センチくらいの大男がいたんですよ！やっぱり大きなマスクで顔を隠してて、しかもこっちに気付くなり、噂通りに犬が追いかけてきて…」

そこまで言って、修丸は身震いした。

隆「しっかし、お前よく無事だったな？」

賢「センパイ確か、犬に追いつかれたら食い殺されるって言ってましたよね？」

修「そうなんです…！昨日は必死だったからどれくらい走ったかなんて覚えてないんですけど、気付いたらいなくなってて。…たぶん、逃げ切れたってことでしょうけど……もう怖くてあの道は通れませんよ。」

孝「逃げ切れたって、お前、ゲームじゃあるまいし…」

本を読み始めながら呆れたようにそう言う孝彦の言葉を聞いて、龍路が不思議そうに龍海の頭をなでつつ訊く。

路「そう言えばお前、友達が口裂け男に会ったって言ってたよな？」

海「うん、言ったよ。」

路「その子の時はどんな感じだったか、聞いてないのか？」

そう言われて、さっきの泣きベソはどこへやら、龍海は少し考え込んだ。

海「うんとねぇ……うん、そうそう！その子も途中で妙に静かになったからって振り向いたら、もういなかったって！」

修「その人も僕も、運が良かったってことなんでしょうかね…？」

賢「もしくは、本当は人を殺すようなことはしない…とか？」

修「まさか！あれは絶対に殺す気満々でしたよ！…ああ、思い出すだけでも恐ろしい！口裂け男がこっちを向いた瞬間に、犬が唸り声を挙げながら走って来て…」

そこまで言って、また身震い。

路「まあ、襲われた本人がそう言うならそうなんだろうけど……なんつーかイマイチ信憑性に欠けると言うか…」

孝「信憑性もクソもねーよ。怖い、怖いと思うから、犬の散歩をしてる人を見間違えただけだって。コイツ、どうしようもないビビリだからな。」

修「違います！あれは絶対に噂の口裂け男ですって！」

珍しくムキになる修丸を見て、賢一が少し怪訝そうに言う。

賢「孝彦センパイ、今の言い方はちょっとないんじゃないですか？」

孝「なんだよ賢一、いきなり……」

孝彦は、賢一の発言にムッとしてそう言う。

賢「いえ……確かに口裂け男なんて信じがたいですけど、でも、修丸センパイが怖い思いをしたのは本当なんです。それを頭ごなしに否定するのは、ちょっとひどいんじゃないですか？」

孝「……！」

孝彦は、正論を言われて何も言い返せない。

修「賢一くん…」

隆「賢一の言うとおりだな。なあ孝彦、いつものことだが、さっきのは大人げなかったぜ？」

孝「なんだと？！」

路「まあ、いつもの事かどうかは知らないけどさ、賢一や隆平の言う通りだぞ。…今のはちょっと大人げなかったな。」

孝「な…龍路まで…！」

さすがにそこまで言われて、孝彦はついに立ちあがった。

孝「そこまで言うなら、みんなで弊踊町３丁目、行ってみようじゃないか！…修丸、もちろんお前も一緒にだ。」

修「ええ？！またあそこ行くんですか？！」

孝「当たり前だろうが。俺がここまで責められるのは誰のせいだ？お前が興味本位で弊踊町に行ったからだろうが！」

修「そ、そうですけど、でも……」

晶「それ、いいかもな！」

孝彦と修丸の問答を今まで黙って聞いていた晶が、若干嬉しそうな声でそう言う。

修「あ、晶センパァイ……（泣）」

晶「修丸、よぉ～く考えてみろ？昨日は噂だけだからってことで口裂け男の記事を書く企画は流れちまったが、実際に遭遇した部員が出たんだ！これはメディア部として逃すわけにはいかないチャンスだ！」

修「そんなチャンス、逃しましょうよぅ～（泣）せめて！せめて、僕以外の皆さんで行くとか…」

孝「お前に責任があるのに、何言ってやがる！…それにな、俺もセンパイも、また１人で行けって言ってるわけじゃないんだ。」

路「まあ、記事にするってんなら写真は必要だから、俺は必然的について行かなきゃいけないし。」

海「そしたら僕ももれなくついてくるし！」

隆「俺も、実はちょっと見てみたい気もしてたんだ！」

孝「俺も言いだしっぺだからな、さすがに行かないってことにはならないだろ。」

晶「同じく、部長の自分が行かないわけにはいかん。ほらな、これで５人は確定だ。…お前たちはどうする？」

賢「あの、僕も行きたいです。修丸センパイが怖い思いしたのに、何もしないってのも嫌だし。」

そんな賢一を見て、陽は嬉しそうに微笑む。

陽「ホント、優しいのね。」

賢「いや、そんなんじゃないよ。」

さも当たり前のようにそう言う賢一に、陽はまた微笑む。

陽「フフ……センパイ、私も行きます。」

晶「と、いうわけで、決まりだな！一応聞くが、異議のあるもの、挙～手！」

そう言われて腕を挙げようとした修丸の首に、すかさず隆平の腕が回される。そして驚いて隆平の顔を見た修丸に、隆平は不敵な笑みを浮かべる。

隆「一緒に行こうぜ？お・さ・ま・る・くん！」

修「……は、はい～（泣）」

泣く泣く返事をした修丸を見て、さらに不敵な笑みを浮かべた隆平は、嬉しそうに晶の方を見た。

隆「センパイ！この議案は可決しました！」

晶「よし！決行は今日の活動終了後！今日の活動は、それに向けての準備だ！いいな？」

賢・陽・隆・孝・路・海「は～い。」

晶「湯堂修丸くん。…返事は？」

修「は、は～い…」

口裂け男に会いに行くことが決まり、メディア部員たちは各々やりたいことをして１８時になるのを待っていた。

隆「た～だいま～ッス！」

賢「あ、おかえりなさい。」

陽「どうだった？補習。」

隆「おう！ちんぷんかんぷん！」

孝「……勉学不足で部活動に支障が出るなら、部活なんて止めちまえよ。」

隆「んだと、この！お前こそいつもいつも部活動中に本なんか読みやがって！」

孝「俺はいいんだよ、部活でやることはちゃんとやってるし、お前と違ってバカでもないしな。」

隆「だから、毎日毎日人の事をバカって言うな！そんなこと言ったら、賢一だって宿題サボりの常習犯だぞ？！」

賢「ちょ、ちょっと！勝手に人を巻き込まないでくださいよ！」

隆「へっ！本当の事だろうが！」

陽「まあ、反論はできないよね（汗）」

賢「ひなまでそんなこと……ひどいなぁ、もう。」

隆「ほら見ろ！俺とおまえで、「メディア部バカ同盟」作ろうぜ？！」

賢「え～、そんな同盟イヤですよ！」

隆「でも、メディア部の２大バカは俺とお前で決まりだろ？」

孝「隆平、お前なぁ…（呆）バカも休み休み言えって。勉強できないバカのお前と、勉強ができないだけでバカじゃない賢一を一緒にすんなよ、このバカが。」

隆「んだとぉ？！さっきからバカバカうるせえな！」

晶「おいおい…龍路がいないんだから、面倒事起こすなよ？」

賢「ハハ…龍路センパイほど、物事を丸く収拾つける天才はいませんよね。」

陽「ホント。」

そんな中、修丸が人目を気にしながらこっそり立ちあがった…が…

晶「おいこら修丸、まだ部活動中だぞ？」

修「え？！あ、いや…トイレです、トイレ…」

孝「カバン持ってか？」

修「あ！いやこれはですね…」

隆「どーでもいいけどよ、帰るにしたってお前、１人で帰れんのかよ？」

修「大丈夫です！弊踊町は通らなくてもちゃんと帰れるんで！」

晶「……帰るつもりだったんだな？」

修「あ……」

しまった、と言わんばかりの顔でそうつぶやいた修丸だったが…

修「スイマセン！」

そう言いながら、修丸はドアに向かって走り出した。

晶「あ、待て！」

その瞬間、修丸がドアノブに手をかける前に、誰かが外からドアを開けた。

路「今帰りました～…って、どうした？修丸。」

陽「あ、お帰り２人とも。」

部室に帰ってきたのは、ビニール袋を引っさげた龍路と、一緒に出掛けていた龍海の２人だった。

海「フィルムもテープも準備ＯＫでーす！これでばっちり口裂け男撮れますよ！」

修「あ、あのぉ…そこをどいてほしいなぁ…なぁんて―」

晶「どかんでいいぞ。部長命令だ。」

賢「ぶ、部長命令って…」

陽「そんな権限、あったかしら？（汗）」

晶の発言に顔を見合わせる陽と賢一。そして、佐武兄弟も同じくお互いに顔を見合わせる。

海「命令だって。どうする、兄ちゃん？」

路「部長命令なら、どけないだろ？」

修「そんなぁ…」

海「あ！さては修丸センパイ、逃げようとしてたんでしょ？！」

修「い、いや別にそんなことは…ト、トイレですよトイレ！」

路「お前さあ、普通はそんな帰り支度バッチリ整えてトイレに行く奴なんていないぜ？」

修「それ、孝彦くんにも言われました…（泣）」

そんな修丸を見て、晶がやれやれといった具合に息をつく。

晶「さて、そろそろ６時だし、これ以上暗くなるのを待って修丸に逃げられるわけにもいかないし、現場に行ってみるか？」

隆「う～ッス！」

海「うわぁ！いよいよですね！」

路「龍海、興奮しすぎてハメ外しすぎるなよ？」

海「だ～いじょ～うぶ！」

孝「あんまり期待していかない方がいいんじゃないか？今日も口裂け男が出るとは限らないからな。」

修「そ、そうですよ！無駄足踏むくらいなら、今日はもうお開きに―」

隆「でも、出るかもしれないんだから無駄足じゃあないだろ？」

またまた隆平の腕回しが入り、修丸は言い返せないでいる。

晶「よし！じゃあ、自分は先生に活動報告してくるから、くれぐれも修丸が逃げ出さないように頼んだぞ。」

隆「ウィ～ッス！」

孝「お前、なんか嬉しそうだな…」

隆「ほっとけ（嬉）！」

修「はぁ～…」

晶が職員室に行ってから少しして、部室のドアが開いた。

賢「あ、晶センパイおかえりなさ…って、先生？」

鳩「おう！響鬼から口裂け男を見に行くって聞いてな、お前たちに何かあったら大変だからな、俺も行くことにしたんだ！」

孝「先生、なんか嬉しそうですね…（汗）」

路「大方、自分も口裂け男を見てみたいって魂胆でしょ？」

鳩「ま、まさかそんな子供じみたことを教師の俺が言う訳―」

晶「あれ？さっきはそう言ってませんでしたっけ？「お前らずるいぞ！俺も口裂け男を見てみたい！」とかなんとか…」

鳩「そ、それはその……ハイ、言いました。」

陽「フフ…先生、なんかかわいい♪」

鳩「そ、そうか？…ハハ」

隆「あれ？先生またまた嬉しそうっスね？」

鳩「そりゃあ、教え子に褒められたら嬉しいだろ♪」

海「それにしたら、顔赤くないですかぁ？」

ニヤついてそう言う龍海に、鳩谷は少し照れくさそうな顔をする。

鳩「まあ～、実はな…俺がお前たちと同じ高校生だった頃に好きだった女の子と宗光がなんとな～く似てる気がしてなぁ…あ、いや！別にだからと言ってやましい気持ちがあるわけではなくてだな！ただ単にお前の笑顔を見るとその女の子の事を思い出すというか……」

路「ダメですよ、先生。陽には姉想いな弟君がいるんだから。なあ？」

賢「ちょ、センパイ！（汗）そりゃあ、ひなは姉として大好きですけど、人をシスコンみたいに言わないでくださいよ…」

孝「まったくだ、お前も立派なブラコンだろうが。」

路「まあな！俺は龍海が大好きだ！」

海「わぁ♪僕も兄ちゃん大好きぃ！」

鳩「と、とにかく！俺は別にやましい気持ちなんてこれっぽっちも…！」

鳩谷はそう言いかけて、ふと晶の視線に気付いた。

晶「……なあ、いい加減行かないか？修丸が可愛そうになってきた。」

そう言いつつ、晶は片手で今にも走り出しそうな格好の修丸の襟をつかんでいる。

鳩「そう思うんだったら、お前も離してやれよ…」

部室でのやり取りの後、メディア部はついに弊踊町に辿り着いていた。１８時を回ったこの時間、もともと人通りの多くない路地はひっそりとしていて、メディア部の足音が響き渡る。

晶「修丸、今何丁目くらいだ？」

修「え？！えっと…」

孝「４丁目ですよ。ったく、電柱に書いてるだろうが…」

修「す、すいません…」

鳩「ん？幾永、お前なんか不機嫌だな？」

孝「別に、そんなことありませんよ。」

鳩「そうか？」

隆「そうそう、大人げないって言われたことに腹立ててるだけですから。」

孝「なんだと？お前じゃあるまいし…」

隆「あぁ？！そりゃどーいう意味だよ！」

孝「言った通りの意味だっての。」

隆「俺のどこが大人げないって言うんだよ―」

路「たかだか１６、１７歳、俺たちみ～んなガキだから。…な？」

いつもの流れで、平然と孝彦と隆平の間に割って入った龍路。

隆「そ、そうなのか？」

孝「まあ、言われてみりゃ、それもそうだな…」

龍路の言葉に、いつものように落ち着き始める隆平と孝彦。

晶「龍路、グッジョブ！」

賢「龍路センパイも来てくれて、ホントよかったですね、センパイ。」

晶「ああ、この安心感はたまらないな。」

陽「ふふ！そうですね。……きゃっ！」

晶の言葉に微笑んでそう言う陽だったが、いきなりついた街灯に驚いた。

海「だいじょーぶ！街灯がついただけですよ！」

陽「え？あ、ホントだ。びっくりしたぁ。」

龍海に言われて上を見た陽は、チカチカと灯る街灯を見てホッとした。が、すぐに様子のおかしい修丸に気が付いた。

修「あ…！」

陽「修丸くん？…どうしたの？」

修「こ…このすぐ先です！僕が昨日口裂け男を見たのは！」

海「ホントですか？」

修「ハイ……！……昨日、ちょうど今みたいに街灯がついて驚いて…それからちょっと歩いたら……」

そう言って、修丸は目線を前に向けた。

修「……！」

鳩「ん？どうした？」

修「あ…あれ！」

隆「あれって……な？！」

修丸が指差す方を見て、隆平も思わず驚いた。それにつられ、他のメンバーもその方向を見た。そこには、まだかなり距離があるものの、昨日修丸が見たと言うマスクの大男と、そのそばに座っている犬がいた。

晶「あ、あれがお前の見たって言う口裂け男か？」

修「ハ、ハイ…！間違いありませんよ！」

海「うわあ、本物だぁ…！あ、ビデオビデオ！」

驚きつつも、いつもの調子でビデオを回し始める龍海。

孝「マ…マジかよ…！口裂け男なんて本当にいるわけ…！」

隆「バ、バカ…！疑うよりもテメエの目ん玉信じろよな…」

驚愕の孝彦に、隆平も同じく口裂け男を凝視したままそう言う。

賢「修丸センパイ、あれって、気づかれたら犬に追いかけられるんですよね？」

修「え、ええ…口裂け男の合図で、こっちに向かってきて…」

鳩「これだけ距離があるからか？まだこっちには気づいてないみたいだが…」

晶「と、とにかく………どうすりゃいいんだ？」

孝「は…？」

路「あの、センパイ？もしかして口裂け男見つけたらどうするかとか、考えてなかったんですか？」

晶「いや、まさか出るとは思わなかったから…（汗）」

鳩「響鬼！お前、部長だろうが！」

海「せ、先生、声大きいですって！」

龍海が驚いてそう言った瞬間、修丸が小さく「あ…」と声を漏らし、口裂け男のいる方を指差した。すると、なんと口裂け男が鳩谷や龍海の声に気付いたのか、いつの間にかメディア部たちの方を見ていた。

賢「こ、こっち見てる！」

隆「気づかれたんじゃね？！」

修「は、早く逃げないと―！」

修丸が言い終わるか否か、今までおとなしく座っていた犬が立ち上がり、唸り声を挙げながら攻撃態勢を取り始めた。

晶「て、撤収！みんな逃げるぞ！」

晶がそう叫ぶと、メディア部は全員来た道の方へ走り出した。

陽「あっ！」

しかし、体力的にか、一番後ろを走っていた陽が慌てた拍子につまづいてしまった。

晶「陽！」

陽の側を走っていた晶が気づいたが、陽のもとに駆け寄ろうとした瞬間に誰かがその横を通り過ぎた。

晶「え…」

その間に、犬は陽に食いつこうと飛び掛かっていた。

陽「や…！」

恐怖に目をつぶった陽だったが、痛みの代わりに何かが軽くぶつかる感触を感じた。

陽「え…」

そうつぶやいて目を開けた陽が見たのは、自分のカバンを犬にかませて犬を抑えている賢一だった。

陽「ヨシくん…！」

晶の声で陽がつまづいたことに気付いたのか、逃げるよりも陽を心配して他の部員たちも立ち止まっている。

孝「アイツ、カバンで…！」

隆「すげぇ！」

賢「大丈夫？立てる？！」

陽「え？う、うん！」

賢一の声に余裕のなさを感じた陽は、答えるや否やできるだけ早く立ち上がった。

賢「走るよ！」

そう言うと、賢一はカバンを力任せに振り回し、犬はカバンに振られて吹っ飛んだ。そして、カバンから犬が離れた瞬間を逃さず、賢一は陽の手を引いて走り出し、それを見た部員たちも再び走り出した。しかし、犬は想像以上の速さで体勢を立て直し、賢一たちに向かってくる。

陽「ま、また来たよ！？」

賢「え？！」

陽が賢一にそう教えた瞬間、犬は再び飛び上った。と、その瞬間に賢一は陽を突き飛ばした。

陽「ヨシくん！」

賢一は背後からの襲撃に、陽をかばうだけで精いっぱいだった。そのために、犬は賢一の左腕に食いついていた。そして、陽には賢一の取った行動の意味がわかっていた。だからこそ、賢一を呼ぶその声は、今にも泣きそうだった。だが…

賢「佐武！フラッシュを焚け！」

その声を聞いて、部員たちはみなハッとなった。

路「え？！」

賢「早く！」

路「わ、わかった！」

賢一の剣幕に押され、龍路は慌てて鞄からストロボを取り出し、カメラに装着してシャッターを切った。その瞬間、ストロボの光に反応した犬はさっきとはうって変わってひるんだ声を出し、その隙に賢一は犬の腹に蹴りを入れ、再び陽の手を引いて走り出した。

陽「あ…！」

そんな賢一の顔が見えた陽は、思わずそう漏らしたが、何を言う暇もなく、メディア部はその場を後にした。

海「も、もう走れない…！」

晶「と、とりあえずついて来てないみたいだし、大丈夫だろう…」

しばらく走った後、メディア部はみな息を切らして立ち尽くしていた。

路「しかし賢一、お前すごい機転だったな！カメラのフラッシュで犬をビビらせるなんて…」

賢「フン…誰が賢一だ…」

今までブロック塀に手をついてうつむいていた賢一は、息を切らしながらも吐き捨てるようにそう言った。

路「お前…！」

陽「やっぱり、ケンイチくんなのね…？」

ケ「フン…」

路「じゃあ、さっき俺に指示を出したのも、ケンイチだったのか…」

晶「でもケンイチ、お前なんで…」

ケ「あのまま、全員犬に食い殺されたかったのか？」

晶「あ、いや…それは…」

ケ「だったらウダウダぬかすんじゃねえ。」

修「あの…もしかして僕たちのために出てきてくれたんですか？」

ケ「寝言は寝て言え。神童賢一が死ねば、オレの存在も死ぬ。オレは、オレ自身のために出てきただけだ。」

陽「ケンイチくん…」

ケ「やめろ…」

陽「え？」

ケ「その顔だ。お前は、そんな顔でしかオレを見れないのか？前だってそうだ。そうやって、人をやっかむような、もしくは、賢一を憐れむような…」

陽「わ、私そんなつもりじゃ……」

孝「おい、前だってそうだけど、お前なんでそう言う物言いしかできないんだよ！」

ケ「フン…バカは黙ってろ。」

孝「バ…？！俺が、バカ？！」

隆「へー、お前バカだったのかぁ！」

イヤミったらしく、かつわざとらしくそう言う隆平を、孝彦はキッと睨む。

孝「なんだと、このバカが―」

海「でもケンイチさん！さっきのアレって…犬ってフラッシュが嫌いなんですか？」

さすがは龍路の弟、龍海も少し強引ながら孝彦と隆平のケンカを見事止めて見せる。

ケ「犬は嗅覚が優れている反面、視覚は色すら識別できないほど悪い。…得てして視力の良くない動物は、光を嫌う傾向にあるんだ。」

海「へぇ…」

路「しかしまあ、その機転といい、一撃で犬をひるませる蹴りといい、お前ってホントすごいな！」

陽「…あれ？でも、ケンイチくんって力とか運動神経は良くないんじゃ…」

思い出したように陽が言う。

路「へ？そうなのか？でもあんなでっかい犬をひるませるなんて、相当脚力がないと―」

ケ「犬は大小関わらず、腹への攻撃に弱い。急所を狙えばあれくらい誰だってできる。」

晶「はあ～…。本当によく物を知ってるな…」

鳩「まったくだ。一体どこでそんな知識を得てるんだ？」

ケ「そんなこと、お前らに関係ない。」

陽「ちょっと、ケンイチくん…！」

鳩「わ、悪い…」

晶「先生が謝ることないでしょ？（呆）…とにかくだ、ネタとしては惜しいが、これ以上口裂け男に関わるのは危険だな。」

鳩「そうだな。俺も顧問として口裂け男の記事を書くのは賛成できん。お前たち、このネタは諦めるんだ。」

修「言われなくても、そのつもりですよ…」

路「お前は２回も追いかけられてるもんな。」

隆「お前じゃなくても、あれはこえーよマジで！」

孝「怪人だろうがなんだろうが、殺意がある危険人物なのには変わりないしな…」

晶「とにかく今日はもう帰ろう。いつまでもここにいたって仕方ない。」

海「そうですね。また追いかけられても嫌だし。」

鳩「じゃあ、帰るか。」

鳩谷が歩き出すとみんなも来た道を学校の方向へ歩き出したが、１人不機嫌そうに立ち尽くすケンイチに、陽は気付いた。

陽「私たちも帰ろう？」

ケ「…フン。」

そう言い放ち、ケンイチは陽を足早に抜いて行った。

陽「……」

家に着いて、陽はまた賢一の部屋のドア越しに話しかけていた。

陽「ねえ、部屋に入れてよ…」

ケ「断る。１人にさせろバカ。」

陽「だって、腕痛いでしょ？軽くしかできないけど手当しなきゃ…」

ケ「そんなことで構うな。血も出てない。」

陽「え？そうなの…？」

ケ「……」

何も答えないケンイチに不安な気持ちを覚え、陽は気になっていることを訊いてみた。

陽「ねえ、ヨシくん今どうしてるの？」

ケ「知るか。」

陽「知るか、って……もう！」

がっかりしたようにそう言って、陽はドアを背にしてしゃがみこんだ。

ケ「わかんねーんだよ。」

陽「え？」

ケ「前はアイツがオレを呼んだから出てやった。だからアイツの心情は手に取るようにわかってたんだ。」

陽「呼んだって、どういうこと？ヨシくんがあなたを呼んだの？」

ケ「まあ、直接呼ばれたわけじゃない。ただ、心の中で助けを求める声が聞こえたんだ。」

陽「助け……」

ケ「アイツは…賢一は、本人の知らないうちに働く直感が人より強い。だから、その直感が自身の心を守ろうとしてオレを呼んだんだろうな。」

陽「直感、か……この前保健室で言ってた、篠原さんの死を予知していたって、そういう事だったのね。」

ケ「……」

陽「ねえ、今回もヨシくんはあなたを呼んだんでしょ？…だからあなたは出てきてくれたんでしょ？」

ケ「いや……」

陽「え？」

ケ「呼ばれてなんかないんだ。今回はオレがアイツを押しのけて出た。」

陽「それって、ヨシくんの意思とは関係なしにってこと？」

ケ「……。いくら運動神経がいいと言ったって、あの状況じゃあ犬に食い殺されるのがオチだ。アイツのせいでオレの存在まで死ぬなんて、冗談じゃないからな。こうなりゃアイツの意思なんて関係ねーだろ。」

そこまで言って、陽には見えないとわかっているからか、ケンイチは珍しくふっと切なそうな顔をした。

ケ「だから、今アイツが何を思っているのかわかんねーんだ…」

その声の変化に気付いたのか、陽は少し驚いた。

陽「ケンイチくん……？」

ケンイチも、陽に自分の心境を気付かれたと思ったのか、さっきと同じようないつもの口調に戻った。

ケ「とにかく、悪いがオレはまだ引っ込むつもりはねーからな。」

陽「え？！」

ケ「おかしいんだよ…」

陽「おかしいって、何が？」

ケ「あの噛み方は本気じゃなかった…」

陽「本気じゃ、なかった……？」

ケ「ああ。あの犬、カバンに噛みついた時には牙が、中身も含めて貫通していた。そんな力で噛みつかれれば骨の１つもへし折れるだろう。だが、オレの腕を噛んできた時には、そんな力なんか微塵も感じなかった。どちらかと言えばただ咥えていただけと言うべきか…まあ、あの時はそんなことには気づいていなかったから賢一を押しのけたわけだが。」

陽「咥えていただけって…どういうこと？」

ケ「あの攻撃に、人間に対する殺意はなかったということだろう。だが、犬に攻撃対象によって力を調節するなんて、そんな知性があるとは思えないがな……となると、あの男の意思が働いていると考えるのが妥当だろうな。」

陽「じゃあ、あの男の人が犬に指示を出して私たちを襲わせたっていうの？」

ケ「どんな指示だかは知らないが、それは明らかだ。あの時、オレたちが口裂け男と犬を見つけた時のことを思い出してみろ。」

陽「え？えっと…」

ケ「あの時、オレたちに気付いたのは男だったか？犬だったか？」

陽「男の人の方だったわ。先生や龍海くんの声が大きかったから…」

ケ「それだ。その時点で、犬は指示を受けていたことになる。」

陽「え？」

ケ「犬の嗅覚を考えれば、あの距離なら男が気付くずっと前にとっくに気付かれていたはず。だが、犬は男がオレたちの方を見るまでじっと待っていた。つまりだ、あの犬は男の指示に従って、オレたちに気付いていてもその場で沈黙を通した。」

陽「じゃあ、男の人が私たちを見たことが、襲えっていう合図だったのかしら？」

ケ「いや、どんなに訓練された犬だとしても、そんなことで指示を読み取り、行動するなんて不可能だ。…だが、事実あの犬はあの状況で男の指示を受けて行動していた。そのカラクリがわかんないことには、オレは引っ込むわけにはいかねーんだよ。」

陽「ケンイチくん…」

ケ「奴の目的、合図もなしに犬を操るカラクリ、口裂け男の正体……」

そう言って、ケンイチは小さく拳を握った。

ケ「生まれた謎は解き明かす。それがオレの使命だ…！」

翌日、陽は１人で学校へと向かっていた。

陽「（もう…ケンイチくんったら、昨日は結局部屋に入れてくれなかったし、あれから一言も口きいてくれないし、今朝だって１人で学校行っちゃうなんて）…」

そう思いながら、陽は今朝の事を思い出していた。

―陽「おはよう、お父さん！」

　父「おう、おはよう。」

　自分の部屋のある２階から１階のリビングに降りてきて、食卓テーブルでコーヒーを飲みながら新聞を読んでいる陽一郎にあいさつをする陽は、ふっと食卓の上を見た。

　陽「あれ？ヨシくん…じゃなくてケンイチくんの分は？」

　父「ああ、賢一…じゃないな、ケンイチならさっき家を出たぞ？」

　陽「え！？」

　父「学校にはまだ早いだろうって言ったんだが、お前が起きると一緒に登校させられるからと言って、さっさと朝食食べて出て行ってなぁ。賢一ならいざ知れず、ものすごく気まずい朝食だった（泣）」

陽「……」

　父「陽？どうした？」

　陽「私のこと、嫌なのかな…？」

　父「へ？」

　陽「ケンイチくん、私の事嫌いなのかなぁって…」

　父「お、おい陽！…そんなに悩むことないだろう？！…あーいうのはお前に限らず、人付き合いが苦手なんだよ！だからできるだけ１人でいようとしている。きっとそういうことだ！」

陽「お父さん…」

必死に説明する陽一郎を見て、陽は小さく笑ってつぶやいた。

父「だから、そんなに悩むんじゃない。ほら、またケンイチの奴、自転車を置いて来てるんだろ？歩きなんだから、早く朝食食べて支度しないと遅刻するぞ？」

陽「そうね……じゃあ、いただきます！」―

陽「（まあ、前みたいに嫌がらないで自分から学校に行ってくれただけでも、まだいいか……）」

そう思って、陽は憂鬱そうな顔をしてうつむいた。

陽「（別にケンイチくんが嫌いって訳じゃないけど、早くヨシくんに戻ってくれないかな……）」

放課後、陽は１年生の教室までケンイチを迎えに行っていた。

陽「（今日はまだ１回も会ってないけど、勝手に帰ったりしてないよね…）」

不安そうにそう思いながら廊下を歩く陽は、１年生の教室のある廊下に差し掛かった。

陽「（あ、よかった…）」

そう思った陽の目に映ったものは、考え事をするように、廊下の窓を開けて頬杖をついて外を見ているケンイチだった。

陽「ケンイチくん！」

そう声をかけられて、ケンイチは億劫そうに陽の方に顔だけ向ける。

ケ「宗光か……何の用だ？」

そう言われて、陽は少し困った顔をした。

陽「あの……できればその宗光って言い方、やめてほしいな……」

その言葉に、ケンイチは再び窓の外に目線を移す。

ケ「なぜだ？」

陽「えっと……ヨシくんは、いつも名前で呼んでくれてたから…」

ケ「何度も言わせるな。オレは賢一じゃないんだ。誰をどう呼ぼうが、オレの勝手だろうが…」

そう言われて、陽は何も言い返せなかった。

ケ「で、もう一度訊くが、何の用だ？」

そう言われて、陽はハッとした。

陽「あ、その！…部活、行こう？」

そう言う陽に、ケンイチは最初窓の外を向いたまま何も言わなかったが、

ケ「めんどくせぇ…」

少しの沈黙の後に、そう言い捨てながらふっと振り向き、部室のある方へと歩き出した。

陽「あ、ちょっと！」

いきなりのケンイチの行動に、陽は驚きつつも慌てて彼の後を追った。

陽「失礼します…」

ケンイチに追いついた陽とケンイチが部室のドアを開けると、スーツを着た見知らぬ男と修丸が何やら話し合っていて、まだ来ていない佐武兄弟を除く他の部員たちや鳩谷も静かにそれを聞いていた。

修「陽さん、ケンイチくん…」

鳩「遅かったな。…って、お前まだ戻ってないのか？」

ケ「…黙れ。」

鳩「え、あ、いや……」

ケンイチの剣幕に押されて黙った鳩谷を見て、陽が気まずそうに言った。

陽「すいません先生…それで、その人は？」

孝「ああ、俺の親父だよ。」

そう言って父親だと言う男を見る孝彦に続き、男は胸ポケットから黒い手帳を取り出した。

将「初めまして。警視庁の幾永将通と言います。」

晶「すごいよな、孝彦の父さんが警察だったなんて初耳だよ。」

孝「あれ？言ってませんでしたっけ？」

晶「ああ、それも捜査一課の警部補だなんてな。」

ケ「おい、それよりもなんで警察がこんなところにいる？…親子団欒なら家でしろ。」

隆「お、おいバカ！お前、孝彦の親父さんに失礼だろ！」

ケ「バカにバカと言われる筋合いはない…」

隆「お前～！孝彦みたいなこと言いやがって！」

晶「……（呆）おい隆平。親父さんの前で孝彦が人のことをすぐにバカにするような言い方をするのは、失礼じゃないのか？」

隆「これは失礼ではありません！真実です！」

ケ「バカが…」

隆「なんだと？！」

陽「ちょっと落ち着いて、隆平くん！ケンイチくんも、そんなに気安く人をバカなんて言っちゃだめよ！」

ケ「フン…」

そう言って、ケンイチはそっぽを向いた。

陽「もう…」

その時、龍海と、龍海を迎えに行っていた龍路が部室に入ってきた。

海「遅くなりましたぁ！」

路「って、その人誰だ？」

陽と同じような反応の龍路を見て、将通は少し苦笑いをした。

将「どうも、孝彦の父です。」

隆「捜査一課の刑事なんだってよ。」

海「刑事って、警察？！うわぁ、僕スーツの警察官って初めて見た！」

そう言って持っていたビデオを回し始める龍海に、将通は呆然としてしまう。

路「あ、すいません。コイツ俺の弟なんですけど、人よりビデオが好きなもんで。」

鳩「そーいうお前も、人よりカメラが好きだろう？」

路「ま、兄弟ですからね。」

さも当たり前と言ったようにそう言う龍路に、鳩谷は苦笑する。

ケ「くだらん話は外でしろ。」

少し苛立った様子でそう言ったケンイチは、再び将通の方を向き直った。

ケ「もう一度訊くが、捜査一課の刑事が何の用だ。」

その態度に、将通は一瞬戸惑った後にすぐに真剣な顔になり、話を始めた。

将「孝彦から聞いたが、君たちは昨日、口裂け男と呼ばれている人物と遭遇したそうだね。」

ケ「それがどうした？」

将「実は昨日の夜…その人物が出没する付近で、犬に噛み殺された死体が見つかったんだ。」

その言葉に、まだ話を聞いていなかった４人のうち、陽と佐武兄弟は驚いた。

海「え？！」

路「マジかよ…！」

陽「死体って、人が死んだってことですよね……？」

将「ああ。状況的に見れば野良犬の仕業だとも取れるが、孝彦から口裂け男の話を聞いたすぐ後の出来事だったから、その人物の犯行でないかという見方も出てきてな。だとすると、これは無差別殺人の可能性が高い。それで、目撃者の君たちから話を聞きたいんだが、協力してくれるかい？」

その話を、陽も佐武兄弟も真剣に聞いている。

海「もちろんです！」

意気揚々と答える龍海だったが、それと相反して龍路は少し困ったような顔をした。

路「と言っても、俺たちただ逃げ回っただけなんですけど…」

龍路同様、陽も同じように困ったような顔で考え込んでいたが、フッと何かを思い出したように顔を挙げた。

陽「あ、でも龍海くん、あの時ビデオ撮ってなかったっけ？」

路「そういやお前、ビデオ回してたな。」

その言葉に、将通は反応した。

将「ビデオがあるのかい？」

海「ハイ！途中走りながら撮ったんでぶれちゃってるかもですけど。」

将「そうか…君、よかったらそのビデオを貸してもらいたいんだが…」

海「いいですよ！」

そう答えてショルダーバックの中を探り始めた龍海は、ふと思い出したかのように龍路を見て、バックの中で見つけたビデオテープを将通に渡しながら言った。

海「そう言えばさ、兄ちゃんも写真撮ってなかった？ほら、ケンイチさんに言われてさぁ。」

路「あー、そういや撮ったな。…あの、口裂け男じゃなくて犬の写真が１枚だけなんですけど、よかったら使います？」

将「本当かい？いや、写真もあると助かるよ。…すごいな、君たち。写真やビデオをしっかり撮っているとは。」

路「俺たち、この部活じゃあそう言う係ですからね。あ、まだ現像してないんで、フィルムでもいいですか？」

将「ああ、それならフィルムを貸してくれれば、こっちで現像しておくから大丈夫だ。」

路「わかりました。」

将通の話を聞いて、龍路は首から下げたカメラからフィルムを取り出した。

将「ありがとう。これでいくらか犯人に近づけそうだ。……じゃあ湯堂くん、また何か思い出したら教えてくれ。」

修「ハイ…」

海「思い出したらって？」

不思議そうに訊く龍海。

修「ほら、口裂け男の話を最初にしたの、僕じゃないですか。そのことですよ。それに、僕の場合みなさんより１回ですけど多く遭遇してますし、なんていうか、聞いた噂で何か思い出しきれてない事があるような、こう、もやもやすると言うか…」

孝「まあ、無理して思い出そうとしなくても大丈夫だよ。なあ？」

将通にそう訊く孝彦に、将通もうなずく。

将「ああ。…とにかく、これ以上の被害が出ないうちに容疑者を探さないといけない。何しろ相手は無差別殺人犯の可能性が高いからな。」

その時、今まで黙っていたケンイチがボソッと口を開いた。

ケ「バカか…」

将「え？」

ケ「お前、本気で無差別殺人だと思っているのか？」

そんなケンイチに、将通は少し困ったように言う。

将「今までの事から考えてもそうだろう？君たちや湯堂くんが遭遇する前から噂になっていたという事は、他にも襲われた人がいたという事だ。それに、現に君は腕を噛まれたそうじゃないか。」

ケ「噛まれてなんかいない。しいて言えば、咥えられただけだ。」

その一言に、陽を除く全員が驚いた。

修「どういうことですか？」

そう訊いてくる修丸に対して黙ったままのケンイチを見て、陽が心配そうに話しだす。

陽「昨日、ケンイチくんが話してくれたんだけど、あの犬は人に対して殺意はなかったって…」

隆「殺意はなかったって、ありゃどう考えても殺す気だっただろ？！」

陽「それが……あの犬、ヨシくんのカバンを噛んだ時には、牙がカバンの中身もろとも貫通してたのに、ヨシくん…いえ、ケンイチくんの腕に噛みついた時にはそんな力はなかったって。そんな力で噛みつかれたら、骨だって折れるだろうけど、血も出なかったって。」

陽の話を聞いて、将通は驚いたように言う。

将「それは本当か！？君、その噛まれた部分を見せてくれないか？！」

そう言う将通に、ケンイチは先ほどの修丸に対するときのように黙りこんだ。

晶「見せてやれ、ケンイチ！」

ケ「ッチ…」

そんなケンイチを見た晶がイラついたようにケンイチの腕を掴んで、噛まれた方の腕の袖を強引にめくった。それを見て、再び部員たちは驚いた。

晶「な…！」

鳩「ホントだ！傷どころか痕もないじゃないか。」

ケンイチの腕を見て驚く一同が少しの間沈黙した間に、ケンイチは鬱陶しそうに袖をおろす。

ケ「あの犬は、明らかに攻撃対象を見極めていた。いや、犬の知能から考えればそんなことはほぼ不可能、となればあの男の指示ということになるがな。つまりだ、あの男、お前らの言うところの口裂け男には、今回死んだと言う人間以外はまったく傷つけるつもりはなかったという事だ。実際、佐武のガキの友達だって無事に逃げ切れたと言うし、１人でいる時に奴に会った湯堂も、追いかけられはしたものの、怪我も何もしてないだろう？」

修「あ、はい…」

ケ「おそらく、口裂け男の真の目的は今回の被害者を殺すことだ。その邪魔が入らないように犬を使ってあの通りを通る人間を遠ざけ、同時に濡れ衣をかぶってくれる口裂け男とかいうふざけた存在を作り上げた……」

路「でもケンイチ、男の指示って言ったって、あいつ、特に指示なんか出してなかったじゃないか！」

海「そうですよ！…こっち向いただけでカバンは噛め、人は噛むな、なんて細かい指示なんて出せるんですか？！」

龍海のその言葉に、ケンイチは珍しく悔しそうにイラつき始めた。

ケ「うるせえよ！」

その言葉に、龍海はいつものように泣き出しそうになり、龍路がその頭をなでてやる。

路「ケンイチ、いきなりどうしたんだよ…？」

それでも心配するように訊く龍路だったが、ケンイチは答えることなく、そっぽを向く。

陽「まだ、それはわかんないんだって…」

修「も、もしかして…口裂け男は犬を操る超能力があるとか…！」

修丸はにわかに怯えだす。

孝「バカなこと言うな！超能力なんてあるわけないだろうが！」

修「そ、そうですけど…」

鳩「だったら、神童の腕を傷つけなかったってのは偶然じゃないのか？口裂け男は全部犬の好きにさせてて、たまたまその時は力が入らなかっただけとか…」

陽「でも、それだったら口裂け男が気づく前に犬に気付かれてたはずだって、ケンイチくん言ってたよね？」

鳩谷の話を受けてケンイチに訊く陽だったが、ケンイチは答えない。

鳩「というと？」

陽「犬って鼻がいいじゃないですか。だから、あの距離だったらとっくに気づかれてるハズなのに、あの犬は大人しく口裂け男の近くで座っていた。それも、口裂け男の指示だったんじゃないかって…」

その言葉に、メディア部員や鳩谷、将通は考え込む。

将「しかし、腕を噛む力が弱かったと言うだけでそこまで気付くとは、すごいな君は！」

ケ「寝言は寝て言え。これくらいのことに感心する方がバカじゃないか？」

その一言に、将通は苦笑したが、鳩谷は慌てたように言う。

鳩「こ、こら！…すいません、幾永さん！コイツ、普段はこうじゃないんですけど…」

そこまで言って、鳩谷は声を潜めた。

鳩「というかこの神童って生徒、なんでも多重人格のようでそうでないようで…」

将「はあ？」

鳩「いえ―」

続きを言おうとして、鳩谷はまるで睨みつけるようなケンイチの目線に気が付いた。

鳩「あ、いえ、なんでも…」

ケ「フン…」

そう言って、ケンイチは部室の出入り口に向かって歩き出した。

隆「お、おい待てよケンイチ！」

ケ「誰が待つか。オレは疲れた。」

晶「おい、まさかお前、また帰るとか―」

ケ「帰る。」

その一言に、部員たちは驚いたのやら納得したのやら、とにかくその場に呆けてしまった。

ケ「おい、幾永。」

孝「へ？」

ケ「お前じゃない。お前の親父だ。」

そう言われて、将通は驚いたようにケンイチを見た。

将「な、なんだね？」

ケ「無差別殺人じゃない以上、動機はあるはずだ。被害者の身辺、死亡推定時刻にアリバイのなく、被害者に動機を抱いていそうな人間を男女関係なく洗っとけ。それと、その人物が犬を飼っているかどうかもな。それができないようじゃ、お前ら警察はバカという事になるだろうな…」

そう言い捨てて、ケンイチは振り向きもせずに部室を出た。

晶「帰った…アイツまた活動中に帰りやがった～！」

路「しかも、今日はまだ活動も始めてないですね（汗）」

陽「ス、スイマセン…」

申し訳なさそうに謝る陽。

晶「い、いや…お前が謝るなよ（汗）」

宗光家では、ケンイチはやはり自室のベッドに横になり、目をつぶったままにいろいろと頭の中を整理していた。

ケ「（犬の優れている能力は嗅覚だ…となると、合図はやはり匂いか？香水か何かの種類で…いや、あの時、奴はそんなものを出したり、仮に見えないところ、ポケットなんかに香水を入れていたとしても、ポケットに手を隠したりする様子はなかった―）」

陽「ただいま～」

ケンイチがそこまで考えた時、１階の方でしっかり部活を終えて帰宅した陽の声が聞こえ、ケンイチは上半身を勢いよく起こした。

ケ「くそっ！わかんねぇ……！」

翌朝、土曜日で学校が休みという事で、陽もケンイチもいつもより余裕を持って朝食を食べていた。と言っても、ケンイチは陽一郎や陽と目を合わせることもなく、食べ終わるとさっさと部屋に帰ってしまったが…

父「なんか…賢一が恋しいな…」

陽「もう、お父さんったら…何言ってるの？」

苦笑してそう言う陽だったが、その時リビングのソファの上に置いてあった陽の携帯が鳴り始めた。

陽「あ、ちょっとごめんね。」

そう言って携帯に表示された名前を見た陽は、少し不思議そうな顔をして携帯を手に取った。

父「どうした？」

陽「うん…部活の友達からなんだけど…」

父「珍しいな。とにかく出てみたらどうだ？」

陽「うん。」

そう言って陽一郎と顔を合わせた陽は、携帯を開いた。

陽「もしもし？」

孝「あ、陽か？」

陽「どうしたの孝彦くん？電話だなんて…」

孝「いやな、親父がケンイチに伝えたいことがあるって言ってんだけど、俺まだケンイチ、ってか賢一の電番知らなくてさ。それでお前に電話かけたんだけど……そーいうことだから、伝言頼んでいいか？」

陽「ええ、いいけど…」

孝彦からの電話を受けて、陽は少し緊張気味に賢一の部屋のドアの前にいた。そして小さくドアをノックしてみる。

ケ「入って来るな。うっとうしい。」

予想していた一言だったからか、陽はそこまで面食らうこともなく、ドア越しに話を始める。

陽「……。あのね、さっき孝彦くんから電話があったんだけど、口裂け男のことで孝彦くんのお父さんがケンイチくんに話があるって…それで、あんまり外部にはもらしたくないことだから、メディア部の部室に来てほしいって…」

ケ「……」

陽「あの、ケンイチくん…？」

何も答えないケンイチに、陽は不安そうに声をかける。と、その瞬間に朝食時の格好に上着を羽織ったケンイチが部屋から出てきた。

ケ「行くぞ。」

陽「あ、ちょっと待って！部室開けてもらうのに、鳩谷先生と晶センパイに連絡しないと…」

ケ「だったら、さっさとしろ…」

陽「う、うん…」

陽が返事をすると、ケンイチは不機嫌そうに階段を降りて行った。

陽とケンイチがメディア部の部室に行くと、修丸を除くメディア部メンバーに、鳩谷と将通がすでに部室に集まっていた。

晶「お、遅かったな！」

その言葉に、ケンイチは答えずに言う。

ケ「おい、なんでお前らも来ている？」

その言葉に、晶は少しムッとしたが、冷静に答える。

晶「部室を使うってことは、一応部活動ってことにした方が自然だろ？だから自分がみんなに声をかけたんだ。まあ、修丸はなんか用事だかで遅れるって言ってたけどな。」

ケ「フン…余計なことしやがって…」

晶「余計って…そいつは悪かったな！」

ケンイチの言葉に怒る晶を無視して、ケンイチは将通のもとへ歩み寄った。

晶「な…！無視かよ！」

路「センパイ、ケンイチの態度はもう気にしない方がいいんじゃないですか？」

晶「そうだな…（呆）」

そんな話をする龍路と晶も気にせず、ケンイチは将通に話を聞き始めた。

ケ「おい、容疑者は割れたのか？」

将「ああ。…その前に、まだ被害者の事は話してなかったな。」

ケ「別に死んだ人間に興味はねーよ。」

そう言うケンイチだったが、龍海が少し遠慮がちに言う。

海「でも、僕ちょっと気になるかも…」

路「こら、龍海！」

海「あ、ごめん…」

将「いや、まあメディア部の君たちにはいろいろと話を聞かせてもらっているからな。…ただし、くれぐれも外部には洩らさないようにしてほしい。君たちに話すという事だって、あんまり良い事とは言えないわけだしな。」

そう念を押して、将通は１枚の写真を撮りだした。そこには、１人の男が写っていた。

将「この男が、被害者の元島穣治だ。今はフリーターだが、２年前までは、それこそ弊踊町の３丁目に店を構えてドッグトレーナーをしていたそうだ。」

隆「なんだ、それ？犬が着る服のことか？」

陽「隆平くん……（汗）違うわよ、ドッグトレーナーっていうのは、犬のしつけとかを飼い主に代わってするお仕事の事ですよね？」

将「ああ。…まあ、依頼にかかる金額や、預かっている犬の管理状況の悪質さから、２年前その店に調査が入ってな、その時に行方を暗ましたまま、小宮山民夫という偽名を使って今まで生活していたそうだがな。」

そう話す将通に、孝彦が少し気まずそうに言う。

孝「親父、あんまり今回の事件と関係ないこと話してると、ほら…」

そう言って孝彦が見た先には、先ほどよりも不機嫌そうな顔をして黙っているケンイチがいた。

将「ああ、すまないな。それで、元島の最後の目撃証言から死体の発見された時間までにアリバイがなく、なおかつ奴に動機がありそうな人物は４人いたよ。まず、１人目は被害者の交際相手で、ＯＬの清水真里之という女性だ。今はアパートで１人暮らしをしているらしい。」

そう言って、将通はまるで回想するように取調べでの様子を話し始めた。

―将「清水さん、あなたはいつから小宮山さんとおつきあいをされていたんですか？」

　　将通と向かい合って座っている清水真里乃は、マスクをつけてガムか何かをクチャクチャと噛みながら話を聞いていた。

清「いつから？ん～っと、確か半年くらい前からかなぁ。ってか、なんで恋人のあたしが疑われなきゃなんないワケ？民夫死んじゃって今すっごいショックなんだけど…」

　　将「いえね清水さん、あなたは昨日の夜、小宮山さんがバイト先のコンビニの防犯カメラに最後に映った時から遺体となって発見されるまでの間、つまり夜の１０時頃から１０時半頃までのアリバイがなかった、違いますか？」

　　清「仕方ないじゃない！あたし、１人暮らししてるんだからさぁ、そんな時間、友達でも呼んでない限り、誰だって１人じゃん。」

　　将「いえ、それだけじゃないんですよ。あなた、小宮山さんに別れ話を持ちかけてて、それを受け入れてもらえていないと言うじゃないですか。」

　　清「まあね。アイツ、最初はすごく優しかったからそれで付き合い始めたんだけど、付き合ってみたら、アイツとんだヒモ男！だから、別れたいってこと話したら、いきなり殴られてさ……ってか、大体民夫は犬に食い殺されてたんでしょ？これって野良犬の仕業じゃないの？」

将「犬に噛まれて亡くなったことは事実ですが、小宮山さんが発見された付近で、犬を連れた不審人物が相次いで目撃されているのも事実です。だからこうして、我々も捜査を進めているんですよ。」

清「不審人物だか何だか知らないけどさあ、あたしはそんなの知らないからね！…ってか、犬の扱いだってよくわかんないのに、犬で人を殺せるわけないじゃん！」

　将「というと、ペットを飼ったりと言う経験は？」

　清「んなもんないわよ！あたし犬とか猫とか嫌いだし、民夫も犬にはいい思い出がないって、毛嫌いしてたんだから。」―

一区切り話し終わる将通に、すかさずケンイチが聞く。

ケ「仕草や癖で、気になったことはなかったか？」

将「う～ん…特段気になったことはないが…そうだな、しいて言えば、やはり態度の悪さは気になったな。話をする時もマスクをつけたままだったし、ガムまで噛んだままだ。あれはどうかと思ったがな。」

そう言う将通の言葉を受けてケンイチは少し考え込んだ後、いつもの調子で言い放つ。

ケ「次の容疑者は？」

将「２人目は、被害者の古い友人で、保険会社に勤める権田継生という男性だ。権田も清水同様、現在はアパートで１人暮らしをしている。この男は、元島が偽名を使って生活していることも知っていてな……」

再び回想のような説明に入る。

―将「では権田さん、被害者の元島さんとはどれくらいのお付き合いなんでしょうか？」

　権「穣治とは、中学、高校が一緒で、卒業してからもちょくちょく会ったりしてましたよ。」

　将「関係はご友人ということで、よろしいんですね？」

　権「あー、いや……アイツ死んじゃったから言えるんだけどさ、どっちかって言ったら、俺って、アイツにとって使い勝手がいいだけっていうか、なんていうか…」

　そう言いながら、権田は左腕の肘を無意識そうに押さえている。

　将「というと、あまり関係はよろしくなかったと？」

　権「刑事さんだって、そのこと知ってるからこうやって話聞いてるんじゃないんですか？」

　将「いや、我々は犯行推定時刻にあなたのアリバイがない事と、被害者があなたに借金をしていた事を調べたうえで、こうしてお話を聞いているのですが。」

　将通の話を聞いている間に、権田はそれこそ無意識に肘を抑えていた手を放していた。

　権「あー、そうでしたか。まあ、両方事実ですね。その時間は家に１人でいたし、金だって、返してくれるはずなんてないけど貸すの断ったらいつも暴力奮ってくるし、俺はアイツみたいにケンカ慣れてないからそれが堪えて、それでいつも仕方なく貸してやってたんですけど、もういくら貸したかとか覚えてないんですよね。」

　話しながらまた肘を押さえ始めていた権田だが、そこまで話して、権田は不思議そうに訊く。

　権「刑事さん、こうして聞き込みしてるってことは、これってやっぱりアイツを狙った犯行なんですか？犬に殺されてたってのも、もう潰れちまったけど、アイツ、店持ってドッグトレーナーやってたからなんとなく繋がってるし…」

　将「それはまだ何とも…ところで権田さん、あなたはペットを飼ったりとかは？」

　権「ペット？…中学、高校生の頃、犬を飼ってたんですけどね、それこそ穣治がふざけて酒飲ませて、死んじまったんです。それ以来、また穣治になんかされるのも嫌で、ペットは飼ってませんよ。」―

ケ「さっきと同じ質問だが、仕草なんかで気になったことは？」

将「ああ、癖だと思うが、ずっと左の肘を押さえていたよ。特に元島の話をする時なんか、ギュッ…とな。」

ケ「その男、元島とのことを思い出すことが相当不安なんだな…」

路「不安？そんな意味があるのか？」

ケ「肘に限らず、話しながら体の部位を押さえる人間は、少なからず不安を覚えていることが多い。元島の話題の時に力を入れるのが、いい証拠だろう。」

海「へぇ～…」

佐武兄弟はケンイチの話に感心している様子である。

孝「ケンイチ、なんかわかりそうか？」

ケ「いや、まだ２人しか聞いていないんだ。もう少し話を聞きたい。」

いつものような、人をバカにするような感じはなくそう言うケンイチに、孝彦も自然と真剣な顔つきになる。

ケ「おい、次だ。」

将「ああ。あとの２人は、いずれも元島と同じコンビニでバイトをしていた人物なんだがな、まずはそのうちの１人、村岡嘉郎の方から話そうか。彼は今、親元で暮らしながらバイトをして稼いでいるんだがな。」

―将「まず、事件当日のバイトのシフトについて教えてほしいんですが。」

　村「はい。あの、これがシフト表です。ちょっと見づらいですが。」

　そう言って村岡が差し出したのは、シフト表を写真に撮った携帯電話だった。

　将「ありがとうございます…なるほど、当日は実際にこのシフト通りだったのですか？」

　村「ええ。僕は１５時から２１時までのシフトで、２１時から２時までの小宮山くんや田代さんと、入れ替わりでした。」

　将「なるほど…一応聞いていおきたいのですが、入れ替わりの正確な時間はわかりますか？」

村「２１時ピッタリです。僕、どうも時間はきっちり守らないと気持ち悪くなっちゃう性質で…いや、そのせいでよく堅物とか言われたりするんですけどね。」

そう言いながら、村岡は少し恥ずかしそうに顔をかく。そんな村岡を見て、将通も思わず微笑ましく笑う。

将「なに、時間をきっちりと守れる人なんて、今の若者にはなかなかいませんよ。」

そこまで言って、将通は真剣な顔つきに戻る。

将「それで、このシフト表を見る限り、犯行のあったとされる時間は小宮山さんや田代さんの勤務時間とかぶっている訳ですが、あなたは交代した後の２人が何をしていたかなどはご存じないんですね。」

村「ええ。でもまあ、休憩時間の可能性もあると思いますよ。うちのコンビニ、基本休憩は同じシフトの人と相談して決めれますし、小宮山くん、休憩となるといつもフラッと外に出ちゃいますから……あれ？でも小宮山くんが亡くなったのって何時頃でしたっけ？」

将「コンビニの防犯カメラに最後に映った夜の１０時頃から、遺体となって発見された１０時半頃の、約３０分の間です。」

村「あ、そっか、だから僕容疑者扱いなんですね。」

そう言う村岡に、将通は少し反応に困る顔をした。

村「いえ、別に嫌味とかじゃなくてですよ。確かに、その時間は気分転換に外を歩いてて、家を空けていたので。その間は親にも連絡入れてませんし。」

将「気分転換と言うと？」

村「いや、お恥ずかしい話ですが、大学を出てもう２年になるのに、なかなか本職が見つからなくて……それで就職に有利になるように資格を取ろうと思って、バイトが終わったら毎日勉強してるんですよ。で、疲れたらよく、休憩がてら夜の散歩に出るんです。」

将「はあ。若いのに、しっかり先を見ているんですね。それにしてもバイトと勉強の両立とは、なかなか大変でしょうに…」

ねぎらうようにそう言う将通に、村岡は嬉しそうに顔をかきながら、今度は将通をねぎらい返してくる。

村「刑事さんだって大変でしょう？これ、殺人事件だとしたらもっと忙しくなるでしょうし。いや、彼の事を考えたら、これは確実に彼を狙った殺人ですよ。」

将「と、言いますと？」

村「いや、死んだ人間を悪く言うのもなんですけど、彼、はっきり言って敵が多いタイプだと思うんですよ。仕事はいい加減だし、ちょっとしたことですぐ癇癪を起こすし、よく店で問題も起こすし……彼とはよく同じシフトか、あの日みたいに交代で顔合わせたりすることが多いんで、最初の方は僕も注意したりしてたんですけど、その度に殴ってきたり、店の棚を蹴り飛ばしたりで、もう手におえなくて……ひどい時なんか、逆恨みなのか金目当てなのかは知りませんけど、僕の財布を盗ろうとしたんですよ！その時はカバンを間違えただけとか言って、しらばっくれてましたけどね。あと、僕だけじゃなくて田代さんも彼には困ってたみたいですし。」

将「田代というと、小宮山さんと一緒のシフトの方ですね？」

村「ええ。彼女も僕や小宮山くんと同じようなシフトが多いんですけどね、前に田代さんと小宮山くんの２人のシフトの時、雑誌類が何冊か無くなったことがあったんです。その時に、最初は小宮山くんが疑われてたんですけど、その次の日に、田代さんが店長に自分がやったって言いに行ってて……僕、なんかおかしいなって思って彼女から話を聞いたんですよ。それでも最初は本当の事を言ってくれなかったんですが、小宮山くんがいない時に、自分がやったと店長に言わないと、ひどい目に合わせるって脅された、僕にこのことを相談したことは絶対に言わないでほしいと言っていて…」

将「その騒ぎの犯人は、小宮山さんだったんですか？」

村「ええ。まあ結局は防犯カメラの映像を見てはっきりしたんですがね。でも、誰かにこのことを言おうにも、そんなことしたら田代さんが僕に相談したことがバレちゃうでしょ？それで、カメラのことに気付くまではどうにもしてあげられなくて…」

将「あなたも大変でしたね。」

村「まあ、だからって殺していいなんてことはない訳ですから、今は彼も災難だな、と思いますよ、ホント…」

将「あと、もう１つだけお聞きしたいんですが、村岡さん、あなたペットを飼ったりはしてますか？」

村「ええ、インコを２羽飼ってますよ。」

将「インコだけですか？」

村「ん～、ペットって言えるかどうかわかりませんが、しいて言えばハエ取り草を一鉢育ててます。ペットって言ったらそれくらいですよ。」

将「は、はあ…ハエ取り草ですか…」―

ケ「敵が多いタイプ、か。しかし、それでよく容疑者を４人まで絞れたものだな。」

珍しく感心するようにそう言うケンイチに、将通は少し誇らしげに言う。

将「偶然だろうが、犯行推定時刻が短いうえに、夜とは言え深夜ではない時間帯の犯行だったからか、アリバイのある関係者が多くてな。それに、偽名を使って過ごしていたためか、元島はあまり交友関係の広い人間じゃなかったみたいだからな。元島の名前の方で奴を知っている人間は、閏台市にはほとんどいなかったよ。」

ケ「なるほどな。」

将「あと、仕草や癖なんだが、村岡は照れる時などによく頬を指でかいていたぞ。あとはまあ、時間にきっちりしているところくらいか？」

ケ「照れるというよりは、おそらく高揚による癖だろう。頬をかく行為には、感情による顔のほてりが関係しているからな。」

孝「お前、ホントに何でも知ってるなぁ……」

ケ「お前たちが無知すぎるだけだ。」

そう言われて、孝彦は怒るでもなく、痛感したような顔をする。

ケ「で、最後の田代とかいうやつは？」

将「ああ。元島や村岡と同じコンビニでバイトをしている、大学生の田代水奈子のことなんだが…」

―田「そうですか…小宮山さんが……」

　そうつぶやく田代は、下唇を軽く噛んでいた。

将「ええ、残念ながら。それで、そのことでいくつか訊きたいことがあるのですが。」

田「はい、なんでしょう。」

将「事件当日、あなたは小宮山さんと一緒のシフトだったと聞いているのですが…」

田「ええ、あの日は２１時から２時までの５時間のシフトで、交替の村岡さんと替わってからは小宮山さんと２人でした。」

将「ところで、店内の防犯カメラには１０時頃から小宮山さんの姿が映っていないのですが、彼はどうしていたんですか？」

田「休憩時間です。うちのコンビニ、同じシフトの人たちで相談して休憩時間を決めるんですけど、彼、私と一緒のシフトの日にはよくほとんど外出しちゃうんで。もしかしたら、私以外の時も平気で外出してるのかもしれませんけど……」

そう言って、田代はまた唇を軽く噛む。

将「ほう……つまり、彼が休憩に入った時が、小宮山さんを見た最後ということですね？」

田「はい。」

将「その間、小宮山さんは何をしているかご存知ですか？」

田「いえ…でも、大抵お店に帰ってきた時には煙草の匂いとかしてるんで、外で煙草でも吸っているんじゃないでしょうか？」

将「そうですか。しかし、１０時頃から１１頃まで、あなたも小宮山さん同様防犯カメラに映っていませんでしたが、何をしていらしたんですか？」

田「お客さんがいなかったので、商品を並べたり、裏に置いてある商品を出したりしてました。……そっか、あの防犯カメラ、入り口とレジ付近しか映してませんもんね。」

将「なるほど……ところで田代さん、あなた、小宮山さんに雑誌を盗んだ濡れ衣を着せられたというのは本当ですか？」

田「え？……えっと、それは……」

将「どうなんですか？」

田「その…本当です。他にも２人だけの時とかは、掃除を押し付けられたりしますし、それに彼、人が困ることとかを、まるで子供みたいに平気でやるんです。私が目を離した隙に持ち歩いてる化粧品を市販のものに入れ替えたり……」

そう言いながら、田代は悔しそうに下唇を噛んでいた。

将「市販のものとは？」

田「私、市販の化粧品が使えなくて、それで、友達が教えてくれた手作りの化粧品を使ってるんです……ホント、あの時はまいりましたよ……同じバイトの村岡さんも、よく嫌がらせを受けてましたけど、彼、私と違ってはっきりものが言える人だから、その都度その都度、小宮山さんを問いただしてて……だからなのかなぁ、私よりは被害が少ないみたいで……」

そこまで話し、田代はハッとした。

田「あ！だからって殺したいほど小宮山さんが嫌だとか、そういう事はないですけど！」

将「わかってますよ。そうそう、あなたペットなんか飼ってたりしますか？」

田「えっと、ペット禁止のアパートなので、ペットは何も飼ってません。花を育てたりはするんですけどね。」―

将「そうそう、仕草や癖なんだが、田代は権田のように嫌なことを話す時にはよく唇を噛んでいたな。聞き込みの時に気付いたのはそれくらいだよ。」

ケ「唇を噛む、か…よっぽど元島を嫌悪していたと見える。」

晶「いや、話を聞いてる限りだが、あんな人間、普通みんな嫌うだろ…（汗）」

そう言う晶に、ケンイチは無言で、かつもっともそうにうなずいた。

将「どうだい？今話せるのはこれくらいだが、何かわかりそうか？」

ケ「フン…短時間で容疑者を４人までに絞ったことは褒めてやる。だが、情報が少なすぎだ、バカ。」

そう言われて、将通は怒るどころか、もっともだと言うように苦笑する。

鳩「神童！お前はもう少し礼儀と言うモノを―」

ケ「黙れ。」

いつもながら、ケンイチの一言に鳩谷は黙ってしまう。そんな空気を崩すべく、隆平が口を開く。

隆「う～ん……マスクって点では清水って女が怪しいけど、何しろ女だしな……犬って点で見れば権田って奴か？いやでも、バイト仲間ってことは一番行動を把握しやすいのは後に話してくれた２人だろうし…」

そこまで言って、隆平はケンイチの方を向く。

隆「てかよ、ペットを飼ってるかどうかは確かに重要だけど、仕草とか癖ってのなんなんだ？勉強にはなったけどよ。」

ケ「フン…そんなこと、自分で考えろバカ。」

隆「な…！」

路「まあ、確かに仕草を気にすれば嘘をついてるかとか、わかりそうだよな。」

隆「お、なるほど！」

路「あ、いや…俺もケンイチの考えはよくわからないんだけどさ…」

晶「しかし、そういうところから考えれば、怪しいのはイヤな話が出た時に癖を出した権田と田代か？」

海「でも、怪しいかどうかは別として、清水って人、警察相手にガムを噛みながらなんて態度悪いですよね！」

鳩「まったく、同じ若者でも、村岡とかいう人を見習うべきだな。今時いないぞ、あんなしっかりした若者は！」

ケンイチの近くでそんな話をする部員たちに、ケンイチは密かに耳を傾け、将通の話を思い出していた。

―将「話をする時もマスクをつけたままだったし、ガムまで噛んだままだ」

将「ずっと左の肘を押さえていたよ。特に元島の話をする時なんか、ギュッ…とな」

将「照れる時などによく頬を指でかいていたぞ。あとはまあ、時間にきっちりしているところくらいか？」

将「嫌なことを話す時にはよく唇を噛んでいたな」―

ケ「……まさか！」

陽「え？」

急につぶやくケンイチに、そばにいた陽が驚く。

陽「ケンイチくん、もしかして何かわかったの？」

ケ「ああ。確信はないが、オレたちに見えないように犬に指示を出し、操っていたカラクリが大体わかった。」

隆「マジかよ？！」

部員たちで話していたはずの隆平が１人、ケンイチの方を見て驚く。

晶「？…隆平、お前いきなりどうした？」

状況を呑み込めていない部員たちに代わってそう訊く晶に、隆平は驚いたまま答える。

隆「いや、ケンイチの奴が、口裂け男が犬を操っていた方法がわかったって言うんで！」

海「本当ですか？！」

ケ「ああ。おそらく奴は―」

ケンイチが説明しようとした瞬間だった。部室のドアが勢いよく開いた。

修「遅れてすいません！！」

晶「修丸！お前、今まで何してたんだ？」

修「いえ、実は弊踊町の３丁目まで……」

孝「はあ？！」

修「そ！その！あの…！」

路「大丈夫だ、誰も怒ってないって。」

冷静にそう言う龍路の言葉に、修丸も落ち着く。

修「あ、スイマセン……」

鳩「で、口裂け男が出現する弊踊町なんかで何してたんだ？」

修「いえ、日中だったら口裂け男も出ないかなと思って、それで何か犯人特定の手がかりでもないモノかと思いまして……なんだか、僕だけビビってばっかりで何の役にも立たないのが申し訳なくて…」

晶「修丸、お前…」

感心するようにそう言う晶だったが、次の瞬間…

ケ「で？」

修「え？」

ケ「お前は弊踊町に時間を無駄にしに行ったのか？」

修「ち、違いますよ……」

陽「じゃあ、何か見つけたの？」

修「ハイ！ほら、電信柱の後ろにこんなものが落ちてたんです！」

そう言って修丸が差し出したのは、手のひらに乗るような小さな入れ物だった。

海「なんですか、それ？」

修「さあ…でも、中にクリームみたいなものが入ってるんですよ。ほら…」

そう言って修丸が入れ物のふたを開けると、そこにはうっすら琥珀色をした、薬のようなものが入っていた。

陽「ホントだ。…きれいな黄色ね。」

孝「黄色って言うよりは、琥珀色だな。」

修「これが落ちてた場所って、口裂け男が立っていた場所でしたし、きっと口裂け男の落し物ですよこれ！」

感心するように入れ物の中身を見る部員たちだったが、将通がそれを見て言う。

将「湯堂くん、ちょっといいかい？」

そう言って修丸から入れ物を受け取ると、将通はその匂いをかいでみた。

将「なんだ、この匂い……ロウソクか？」

ケ「ロウソクだと？……ちょっと貸せ！」

珍しく感情的に、将通から入れ物を奪ったケンイチは、その匂いをかいで驚いた。

ケ「…違う！これは蜜蝋だ！」

海「みつろう？」

不思議そうな顔をする龍海に、ケンイチは謎のクリームを凝視したまま話し始める。

ケ「簡単に言えば、蜂が作る蝋の事だ。ワックスに混ぜて使ったり、他には保湿効果があることを利用して、薬用品なんかにも使われて―」

その瞬間、ケンイチの脳裏を何かがよぎっていった。

ケ「そうか、だから……！いや、だとしてもおかしい……」

陽「ケンイチくん……？」

心配そうにケンイチを見つめる陽だが、そんな２人を気にせず、部員たちは話を続けていた。

路「ん？修丸、お前ポケットから何か出てるぞ？」

修「え？あ、ホントだ…」

そう言って修丸がしまい直したのは、生徒手帳だった。

海「あ！高校の生徒手帳だ！」

晶「おい、今日は学校休みなのになんで生徒手帳なんか持ってるんだ？」

修「いや、それはその…」

言葉を濁す修丸を見て、孝彦が呆れたような顔をする。

孝「お前まさか、口裂け男に襲われた時にそれを落として、なんだかんだ捜査を手伝ってるみたいなこと言って、それを拾いに行ってたんじゃないだろうな？」

修「いや！それは…！」

晶「図星か…」

修「……（汗）はい、そうです……」

隆「お前、格好悪いぞ？」

修「うぅ…」

意気消沈してしまった修丸を見て、龍路がやれやれといった様子で苦笑しながら言う。

路「ま、あんな状況で襲われたら、モノの１つや２つ、落としても無理ないさ。」

修「龍路くん…」

龍路のフォローに嬉しそうな顔をした修丸は、ふうっと安堵にも似た一息を付いた。

修「でも、口裂け男にまで追いかけられなかっただけマシですよね。あんな大男に追いかけられたら、犬共々、あっというまに追いつかれそうですし……」

その一言に、またもやケンイチは反応した。

ケ「おい！今なんて言った？！」

その呼びかけに、部員たちはみな反応してケンイチや陽の方を向く。

ケ「湯堂、お前に訊いてるんだ！今なんて言ったんだ？！」

修「え？！えっと、口裂け男に追いかけられなかっただけマシ―」

ケ「そうか……そうだったのか！」

修「え？」

晶「おい、どういうことだ？」

ケンイチは将通から奪い取った入れ物を見せながら話し始める。

ケ「コイツの正体がわかった時、幾永の親父の話から犯人の見当はついたんだが、それでも１つだけかみ合わない事実があったんだ……だが、今の言葉のおかげで、その謎も解けた！」

晶「ホントか？！そう言えばさっき、犬を操っていた方法もわかったって言ってたよな？！」

ケ「ああ。これで、解き明かすべき謎は消えた。……行くぞ。」

陽「行くって……どこに？！」

ケ「口裂け男のもとにだよ。」

将「しかし、まだ証拠も何もないのに、問いつめるわけには……」

ケ「元島が構えていたという店、今はどうなってるんだ？」

将「え？」

ケ「だから、どうなってるんだと訊いている。」

将「今は空き家のままになっているよ……一応、鎖を使って敷地に入れないようにはしているが……それがどうしたんだ？」

ケ「なに、お前に口裂け男を示す動かぬ証拠を見せてやろうと思ってな。あと、そのために必要な、持ってきてもらいたいものがある。」

将通にそう言うケンイチに、部員たちは不思議そうな顔をするばかりだった。

夕方、暗くなりかけたとある建物の中で、１匹の犬が伏せた状態でじっとしていたが、ピクリと何かに反応して状態を起こし、次第に嬉しそうに尻尾を振り始めた。そこに、１人の人影が歩み寄り、かわいがるように犬の頭をなでてやる。…と、その瞬間！まばゆい光がその人物を照らしたかと思うと、人物は咄嗟に腕で顔を隠した。

ケ「やはり来たな、口裂け男さんよ……」

人影が声の方を振り向くと、そこにはどこかに隠れていたのか、ケンイチと将通、カメラを構えた龍路が立っていた。

将「しかし、本当にここに来るとは……」

ケ「警察に対して、犬を飼っているのに飼っていないなんて嘘は通じない。なら、犯行に使った犬はどこか人の立ち入らない場所で隠れて飼っている可能性が大きい。……もともとここは元島の悪質な犬の管理状態のせいで壁中牙や爪の後だらけだ。ここなら、引き上げた後に万が一その犬がつけた傷が見つかっても、ごまかすことは容易だし、犬の声が聞こえようと、ここから逃げ出した犬が餌でも漁りに来たと思われるだろうしな。何しろ、ここは入ろうと思えば入れるとは言え、１年前から封鎖された建物。人目を忍ぶにはもってこいと言うわけだ。」

その話に、将通は納得しているような顔をしている。

将「なるほど……君の推理力は本当に舌を巻くよ。」

ケ「さあ、顔を見せてもらおうか。」

そう言うケンイチに対しても顔を見せようとしない人影に、ケンイチは少し痺れを切らしたように言う。

ケ「おい、写真は押さえたんだ。顔を見せろ。」

しかし、それでも人影は強情に顔を見せようとしない。

ケ「フン…あくまで顔を見せないと言うなら、こっちにも手はあるぜ？」

そう言って、ケンイチは懐中電灯を取り出し、その光を犬の方に向けた。すると犬はキャインと鳴き、その場でのたうちまわり始める。

田「やめて！」

そう言って犬に当たる光をかばうように犬の前に出てきたのは、元島のバイト仲間、田代水奈子だった。

将「田代水奈子……君が、小宮山民夫、もとい元島穣治を殺した犯人だったのか……！」

田代の姿、そして将通の言葉に、散らばって隠れていたメディア部のメンバーが各々驚いた顔を隠し切れずに現れる。その中で、龍海はすでにビデオを回し始めていた。

海「この人が、口裂け男……？」

晶「でもケンイチ、この人って女じゃないか！！」

隆「そうだよ！犬を使って元島を殺した犯人は口裂け男、つまり男のはずだろ？」

驚く部員たちに、田代は警戒の色を見せて犬を抱きかかえたまま、一言もしゃべらない。

ケ「口裂け男…誰が呼び始めたかは知らないが、お前にとってこれは都合のいいことだったな。いや、大方、どう見ても男の体型でない自分から疑いの目をはらすため、わざわざあんな格好をしていたのかもしれない。」

その一言に田代はなおも警戒を強め、他の部員は不思議そうな顔をする。

鳩「あんな格好って、どういうことだ？」

ケ「お前たちの中で、口裂け男の顔が見れたものはいるか？」

孝「いるわけないだろ。でっかいマスクにサングラス、それに帽子を目深にかぶってたんだからな。」

ケ「つまり、誰もアレが男だとハッキリ見えた者はいなんだ。その体躯と噂だけで、勝手に男だと思い込んでいたというわけだ。」

陽「でも待って！田代さんはどう見ても１６０センチだってないわ。だけど口裂け男は１８０センチはあったのに……」

ケ「その謎も解けている。」

冷静にそう言い放つケンイチに、みな驚きを隠せない。

晶「解けているって……何をどう頑張ったら１６０ない人間が１８０センチになれるって言うんだ！」

ケ「だから、さっきから口裂け男の格好の事を言ってるだろうが……」

呆れたようにそう言うケンイチに、晶はまだ理解できていない。

晶「恰好…？」

ケ「思い出してみろ。口裂け男はどんな物を着ていた？」

修「えっと……コートです。すごく長い丈の。」

ケ「そうだ。まるで足元を隠すかのように長い、な……」

その言葉を聞いて、鳩谷が少し自信なさそうに言う。

鳩「まさか、シークレットブーツ？……いや、まさかな（汗）」

ケ「それだ。」

鳩「え？ホントに（汗）？」

冗談交じりの発言が的を得ていたことに、鳩谷本人が驚きを隠せない。

海「なんですか、それ…？」

不思議そうに悩む龍海。

路「背の低い奴が、周りにバレないように背を高くできる靴の事だよ。結構昔に流行ったみたいだが、慣れないうちは足への負担がデカいって、使う人そこまで多くないらしいけどな。」

海「ふ～ん…でもケンイチさん、なんでそんなことわかるんですか？」

ケ「簡単だ。あの時、オレたちが口裂け男と遭遇した時、犬こそ追いかけて来たものの、男本人はまったくと言っていいほどあの場所を動こうとしなかった。顔を隠している本人はともかく、犬の写真やビデオなんて厄介なモノを撮られているにも関わらずな。」

修「そうです！最初に口裂け男を見た時もそうでした！元から立っていた場所から一歩も動かないで、犬だけがこっちに向かってきて……」

海「そう言えば、友達も口裂け男も追いかけてきた、ってことは言ってなかったかも……」

晶「でも確かに、かかとの高いシークレットブーツを履いていたとなれば、走って追いかけるのは確かに難しいな。ましてその身長なら、履いていたブーツはかなりかかとが高いだろうし……」

陽「じゃあ、口裂け男はただ追いかけてこなかったんじゃなくて……」

ケ「追いかけられなかったんだ。慣れない履物のせいでな。」

隆「……ん？でもよ、それだったら清水って女はどうなんだ？シークレットブーツを履いていたなら、ソイツだって大男に見せかけることくらいできるだろ？取り調べん時もマスクしてたらしいし。」

ケ「そうだな…だが、身長は聞いていないから何とも言えないが、他の２人の男だって、１８０センチないとすれば口裂け男である可能性はある……」

その言葉に、晶や隆平、孝彦などの数人が呆れる。

隆「はあ？！」

孝「おい、男も可能性はあるって……それじゃ今の話は何だったんだよ？！」

晶「そうだぞ、ケンイチ。お前、話があっち行ったりこっち行ったり―」

ケ「何もわからないようなバカは黙ってオレの話を聞いていろ。」

晶の言葉を遮ってそう言うケンイチに、晶は怒るでもなく、その剣幕に押されて黙り込んでしまった。

ケ「オレがまず言いたいこと、それは結局あの人物は男でも女でもあり得るという事だ。……だが、そんな中で犯人を特定する手がかりは、他にあるんだ。」

鳩「他…？」

ケ「おい、例の入れ物はまだ持ってるか？」

そう言われて、将通は慌ててポケットに手を入れた。

将「あ、ああ！これだろう？」

そう言って将通が取り出したのは、例の蜜蝋の匂いがするクリームの入った入れ物だった。

陽「それって、修丸くんが見つけてきた物よね？」

ケ「ああ。」

孝「結局、それってなんなんだよ。お前、部室でそのこと話しながらいきなり黙り込んじまうし…」

ケ「コイツは…手製のリップクリームだ。」

陽「リップクリーム？！」

ケ「ああ。この匂いのもと、蜜蝋が主に使われるのは、部室でも話した通り、ワックスや薬用品、そして化粧品だ。」

海「そう言えば、田代さんは手作りの化粧品を使っているって……」

ケ「リップクリームだけが手作りというのなら、こだわりということも考えられる。だが、市販の化粧品全般がダメだと言うのはおそらく、プロピレングリコールに対するアレルギーだろう。」

その一言に、田代は再び警戒の色を高める。

隆「プロペラ…？」

ケ「違う。プロピレングリコールだ。…コイツは市販されている多くの化粧品に含まれている保湿剤であり、同時に、市販の化粧品が使えないという人間が拒否反応を起こす物質の事だ。化粧品に対するアレルギーと言えば、まずコイツから疑うのが妥当なとこだろう。」

路「でも、それこそ手作りの化粧品を使ってるってのもこだわりなんじゃないのか？それだけでアレルギー体質なんて…」

ケ「お前、容疑者たちの癖の事、忘れてないか？」

路「癖？…ああ、肘押さえたり顔かいたり、唇噛んだりってヤツか？」

将「まさか、唇…」

ケ「気付いたか？確かに何も知らずにその様子を見たんじゃ、悔しさや嫌悪から唇を噛んでいたとも取れる。だが、おそらく田代は体質に合ったリップクリームを無くした状態で唇の渇きを我慢できずに、嘗めていただけだったんだ。どこでも買えるような市販のリップクリームも使わずに、そんなことをしているとなれば、おのずと答えは見えないか？」

将「市販のものはアレルギーを起こすから使えなかった。そういうことだね？」

ケ「ああ。やはり、癖を訊いておいたのは正解だったよ。蜜蝋の匂いからコイツがリップクリームだと分かった時、同時に田代が怪しいと思えたのは、お前からアイツの癖を聞いていたおかげだからな。」

少しだけだが、感謝するような顔でそう言うケンイチに、将通は少し照れくさそうな顔をする。

ケ「あとは、アリバイだが、これは説明するまでもないだろう。客も他の従業員もいないコンビニから、元島を現場に連れ出し、ここで密かに世話をしていたその犬を使って殺させ、できるだけ急いで、客が来ないうち、もしくは来ていたとしても怪しまれないうちに店に戻った。違うか？」

そう言われ、田代は悔しそうにケンイチを見据える。

ケ「反論なし、か……まあ、写真に撮られた犬の世話をしに来たところを見られちゃ、言い逃れはできないだろうがな。」

軽く勝ち誇るようにそう言うケンイチに、鳩谷が少し慌て気味に言う。

鳩「待て、神童！お前、１番大事なことを説明してないじゃないか！」

そう言う鳩谷を面倒くさそうに見たケンイチや、不思議がる部員たちを苦にせず、鳩谷は続ける。

隆「なんスか？大事な事って……」

鳩「そりゃ、口裂け男がどうやって―」

そう言いかけた鳩谷を、ケンイチは片腕を伸ばして制した後、やれやれと言わんばかりの顔でポケットに手を突っ込み、左手で何かを掴み、右手でマスクを取り出した。

陽「ケンイチくん、何するの？」

ケ「黙って見てろ。今から、口裂け男が犬を操ったカラクリと同じことをしてやる。……まあ、オレにできるのはあの犬を反応させるくらいだろうがな。」

そう言ってケンイチは左手を口元に宛てたままマスクをつけ、そっと左手をマスクから抜いた。そしてうつむいていた顔を挙げたその瞬間だった。

ウウゥウゥゥ！

犬が低い唸り声をあげたかと思うと、まるで興奮するかのように落ち着きを無くし始めた。

修「い、犬が唸り始めました…！」

晶「おい、襲ってくるんじゃないだろうな！」

未だ唸り声をあげる犬を見た田代は慌てて犬をなだめようとするが、すぐに犬は落ち着き、田代は不思議そうな顔をしてケンイチを見た。すると、ケンイチはすでにマスクを外し、その手に銀色のホイッスルのようなものを持っていた。

ケ「これが、口裂け男が犬に合図を送るために使っていたカラクリ……犬笛だ。」

孝「犬笛って、犬の訓練に使うあれか？」

ケ「ああ。」

隆「なあ、俺にも分かるように説明してくれないか？」

まるで答えがわかっていないことを開き直ったようにそう言う隆平に、ケンイチは珍しく普通に答え始める。

ケ「犬の優れた能力といえば、まず間違いなく嗅覚だろう。だが、嗅覚には劣ろうとも、犬には人間に比べてはるかに優れた聴力も備わっている。そして、この犬笛は人間には聞こえず、かつ犬には聞こえる音を出すことができ、この音の組み合わせで指示を送ることができるんだ。…オレの場合、田代がどんな音の組み合わせでその犬を訓練させたかは知らねえから、犬の反応をあおる程度だったがな。」

修「でも、そんなものよく持ってましたね。」

将「いや、ここに来る前に神童くんに頼まれてね、ペット関連の品を扱っている店によって買ってきたんだ。」

孝「なるほど、さっき親父に頼んでたことって、これのことだったのか。」

感心する孝彦に、ケンイチは笛を口の前まで持ってきて、マスクもゴムをかけずに笛ごと口にかぶせるようにして言う。

ケ「これをマスクで隠しちまえば、合図の出所はわからない。」

そう言って、ケンイチはマスクと笛を口前から外した。

ケ「……顔を隠しつつ、合図も隠す。よく考えたもんだぜ。」

言葉とは裏腹に、ケンイチの口調からは微塵も感心している様子はうかがえない。

将「しかし、確かに君の話はすべて筋が通っているが、いかんせん証拠がない。確かにあの犬の世話をしに来た時点で十分怪しいが、いわゆる物的証拠が…」

そう言う将通を見ることもなく、ケンイチはすっと犬笛をくわえた。

陽「ちょっと、ケンイチくん……？」

陽がそう言うや否や、犬は先ほどとは打って変わって、まるで狂ったかのように田代の手を抜けた。

田「あ！！レンタ、待って！レンタ！！」

そう言って田代が驚いている間にも、レンタと呼ばれた犬は狂ったように屋内を走り回り、次第に壁と言う壁に体をぶつけはじめる。

海「いきなり、どうして…！？」

晶「おい、お前何やって―」

そう言いかけた晶は、ふと田代の方を見て言葉を失った。そこには、ケンイチの吹いているものとよく似た笛をくわえた田代がいて、そしてレンタはまた穏やかに田代の方へと歩き始めていたからだ。

路「笛だ…」

隆「じゃあ、じゃあホントにあの人が……」

驚く部員たちの目もくれず、田代はまるで怖い目にあった子供をなだめるかのようにレンタを抱いていた。

田「あなたひどいわ。そんな高い音でレンタを怖がらせるなんて……私、あなたに何も反論してないじゃない…」

ケ「フン…黙認は反論も同じだ。ソイツが暴れまわったのは、お前の責任じゃないのか？」

田「私の責任…？」

億劫そうにケンイチを見た後、田代は自嘲気味にため息をついた。

田「そうね、確かに何の罪もないこの子を人殺しの道具にした時点で、責任はすべて私にあるのかもね。」

将「では、認めるのか？」

田「認めるも何も、その子が言った通り、レンタの世話をしにここに来たところを見られた時点で、私は覚悟を決めてたつもりです。ただ、その子の話が、まるで見て来たかのように当たってたから、つい聞き入っちゃって。それが反論だなんて言われるとは思いもしませんでしたけど。」

将「……。やはり、バイトでの嫌がらせが原因か？」

そう言われて、田代はなおも自嘲するような笑みを漏らす。

田「私、そんなに弱そうに見えます…？まあ、実際弱いからそう見えるんだろうけど……」

孝「あの、よかったらそのこと、訊いてもいいですか？」

孝彦にそう言われ、田代はレンタの頭をなでながら話し始めた。

田「ええ、こうなったら、あの男が私の母にしたことを、話さないとね…」

そう言う田代に、部員たちは注目する。

修「母にしたこと…？」

田「あの男……本当は元島っていうみたいだけど、アイツは４年前に私のお母さんを殺したのよ。」

晶「殺したって……元島は２年前までドッグトレーナーをしていたんじゃないのか？人を殺したと言うなら、悠長にそんな事できるはずないんじゃ……」

田「あの時は、警察に通報できる状況じゃなかったのよ。どっちにしたって、証拠も証言者もなし、にわかには信じがたいような犯行だったし……」

路「信じがたいってのは？」

田「あの男は、今回の私と同じ方法で母を死に追いやったのよ。犬を犬笛で操って、私たちを襲わせて……それも、面白半分の遊び心でね！」

そう言った田代は、ひどく怒りの感情をあらわにしていた。そして、思い出すかのように語り始める。

田「生まれた時には、すでに父が病死してていなかった私にとって、お母さんは唯一頼れる存在だった……女手１つで私を一生懸命に育ててくれて、私はそんなお母さんが大好きだったわ……」

―田代は４年前のことを思い出していた。

田（Ｍ）「４年前、私たちは閏台市からは遠い町で暮らしてたわ。その頃受験生だった私は予備校に通っていて、帰りはいつも遅かったからお母さんが迎えに来てくれていたの。あの日もそうだった。」

人がまばらに出てくる予備校の前に、数人の親たちが子供が出てくるのを待っている。そして予備校から出てきた１人の女生徒がその中の１人の女性に気付き、嬉しそうに駆け寄る。

田「お母さん！」

母「水奈子、お疲れ様。」

そう言ってほほ笑む母に、田代も嬉しそうに笑った。

街灯の灯りが頼りである路地を２人で歩く母と田代は、ふっと通りがかった公園の方に目をやった。そこには、１人の男、当時の元島が笛を用いて犬を訓練していた。

母「あら、こんな時間に何してるのかしら？」

田「なんか笛みたいなの吹いてるし、犬の訓練とか？」

母「そうね、きっとそうかもね。」

母はそう、田代に優しく微笑みかける。

田（Ｍ）「最初はそんな程度にしか思ってなかった。だけど、アイツはそれから毎日その公園に犬と共に現れたの。」

田代たちが元島を見てから数日後、元島はいつもと同じような時間に犬を連れて公園に来ていた。

田「ねえ見て、今日もあの人いるわ。……わざわざ、こんな夜に来なくてもいいのに……」

母「日中は忙しいんじゃない？…それにしても、毎日なんて熱心な人ね。」

田「でも、一体どんなことを訓練してるのかな？」

母「さあ…？」

田（Ｍ）「その時に気付いていればよかったのに。あの男が犬に何をさせようとしていたか……！」

それからまた数日後、いつものように公園の前を通ろうとした田代と母だったが、その日だけはいつもと違い、元島と犬は公園の入り口に立っていた。その日に限り、元島はマスクをしている。

母「あら、あれっていつもの人じゃない？」

田「ホントだ。どうしたんだろう…」

その声を聞いて、元島は２人に対して口を開いた。

元「なあ、あんたらいっつもこの道通ってるけど、なして？」

そんな元島に、母は優しく答える。

母「この子の塾が終わるのが遅い時間なので、迎えに来てあげてるんです。」

元「ふ～ん、塾ねぇ。あんた偉いねぇ。」

無関心層に田代にそう言う元島だったが、田代は警戒して母親の後ろに隠れ気味になる。

母「あなたも最近、よくここに来てますよね？何をしてるんですか？」

そう言う母に、元島はニヤリといたずらっぽい笑みを浮かべた。

元「……あんたらさ、自分の意のままに犬を操れたら面白いと思わない？たとえば、自分に代わって嫌な奴を噛み殺してくれたりとか、さ。」

元島はそう言うと、ポケットから何かを握って取り出し、それを握った左手をマスクの中に入れた。それから程なくして、先ほどまでおとなしくしていた犬が、いきなり唸り声をあげて２人へと近寄り始める。

田「やだ、こっち来るよ！」

母「ちょっと、あなた何を？！」

怯えはじめる２人を見て元島はなおニヤニヤと笑っている。そして、ついに犬が走り始めた。それを見た母は慌てて田代の手を引いて走り始める。

田「なんで？！なんで追いかけられるの？！」

母「わかんないけど、止まっちゃダメ！止まったら―！」

そう言いかけ、母はいきなり田代を突き飛ばした。

田「お母さん？！…あ！」

驚いた田代が目にしたもの、それは犬にのしかかられた状態で腕を噛まれている母の姿だった。

田「お母さん！…お母さん！！」

必死になって犬を離そうと引っ張っても、犬は微動だにしない。と、そこへ元島が歩いてくる。それに気付いた田代は、犬を引っ張り続けながら元島に言う。

田「ねえ！なんでこんなことするの？！この犬、なんとかしてよ！」

そう言われて、元島は相変わらずの調子で答える。その声は、まるで煙草でも咥えているかのような調子だった。

元「なんでって、さっき言ったじゃん。犬を操れたら面白いだろうって。」

田「でも、なんで私なの？！私たち、あなたに何かした？！」

元「別に。あんたらはただの実験台。」

田「実験台？！」

元島の一言に、田代はひどいショックを受けた。

元「夜な夜な調教するのはいいけどさ、いざ実戦ってなってうまくいかなかったら嫌じゃん？だから、決まってこの時間にここ通るあんたら使って実験しようかなって思ってさ。」

田「……こんなことして、あなた絶対捕まるんだから！」

そう言った田代に、元島は威圧的な目線を送る。

田「あ…！」

元「お前、俺のこと通報する気か？」

田「え、いや……」

元「実験だからさ、せっかく半殺しで済ませようかと思ったけど、それならお前ら２人とも殺さなきゃな。」

田「……」

薄ら笑いを浮かべてそう言う元島に、田代は涙を流して言った。

田「……しないから」

元「ああ？なんだって？」

田「通報しないから！だからお母さん助けてよ！！」

その言葉を聞いて、元島はまたニヤリと笑った。すると、犬は大人しくなって元島のもとへ戻ってくる。

元「今の、嘘じゃねーだろうな？」

田「え、ええ……」

田代の答えを聞いて、元島はマスクから犬笛を吐き出し、それをポケットにしまった。

元「まあいいや。助かったからって通報したら、お前ら死ぬぞ？コイツはもうお前らの匂い覚えたからな。それに、この町にゃあ予備校なんて１つしかねえんだから、いくらでもお前らに辿り着く方法はあるんだよ！」

そう言い放つ元島を、田代はただ涙目で睨むことしかできなかった。

元「しっかしまあ、実験協力どーもありがとうございました、お２人さん！…アハハハハ！！」

そう高らかに笑いながら、元島は去って行った。―

田「私は元島の言葉が怖くて、警察には何も言わなかったし、治療だって自分たちで出来る事だけをやった。でも、それからお母さん、高熱が続いたり体が麻痺しだして……それで病院にかかったんだけど、結局は手遅れで死んじゃった……病院の先生、狂犬病だって言ってたわ……」

将「まさか、元島は狂犬病にかかった犬でそんなことをしていたと言うのか！？」

その言葉に、田代は小さくうなずく。

田「ええ。あれより先にも後にも、お母さんは動物に噛まれたりなんてしてないもの。そうとしか考えられないでしょ？……だから、お母さんはあの男に殺されたも同然なのよ。」

田代の話を聞きつつ、隆平は少し不思議そうな顔をする。

隆「でも、狂犬病って犬の病気じゃないのか？」

ケ「フン…狂犬、なんて名ばかりだ。狂犬病は人間を含めたすべての哺乳類が感染するんだからな。」

隆「え？！マジかよ？！」

ケ「ああ。ウイルスに感染した動物に噛まれた場合、噛み傷から唾液を介して高い確率で感染する。そして、発症すればまず間違いなく死亡する。」

鳩「だが、犬を飼う時は狂犬病の予防接種が義務付けられてるんじゃ…」

ケ「飼い主を考えてみろ。悪徳ドッグトレーナーが、毎年打たなければいけない予防接種を飼い犬に受けさせると思うか？」

鳩「そ、そうか……確かに、その元島と言う男ならありえないな…」

将「確かに奴の店がつぶれた後に慈善団体に引き取られた犬たちの多くが、狂犬病に感染していたという報告もある……元島の奴、なんてことを……！」

田「……。お母さんが死んじゃったんだもの、たとえ殺されたってどうなってもいいと思って警察に相談したんだけど、名前も何も知らなかったうえに、その時にはすでにアイツはあの町から逃げていたから、もう手遅れだったわ。…それからは本当に辛かった。唯一の心の支えだったお母さんを失って、それでもこのご時世、大学に行かなきゃ就職なんてできないから必死で勉強して、なんとか大学に入っても学費は自分で稼がなきゃいけないから、勉強とバイトの両立もしなくちゃいけないし……。だけど、いつか必ずあの男を見つけ出して、お母さんの仇を討ってやる！その想いだけは忘れなかった……」

将「では、君は小宮山が元島だと知っていて、奴を殺す機会をうかがうためにあのコンビニでバイトを？」

田「いいえ、それは偶然です。もともと先にあそこでバイトを始めたのは私の方だし、仇を討つって言っても、殺すなんてことは少しも考えてなかったわ。……あの男にあんな事を言われるまではね。」

―田（Ｍ）「２年前、あの男が新人バイトとしてやってきた時、その顔を見て私はすぐにあの日の男だと気づいたの。それで、なんとなく探りを入れてみたのよ。」

　　バイトをしながら、客がいないことを見計らって、田代はダルそうに仕事をさぼっている小宮山（以下、元島）に訊いてみる。

田「あの、小宮山さん……あなた私の事覚えてます？」

元「あん？いきなりなんだよ……」

田「いえ、私このバイト以外でもあなたに会ったことがあるんですよ……」

元「知らねーよ。お前なんて……」

興味なさそうにそう言う元島に、田代はとびきり憎悪のこもった声で言う。

田「人殺し……」

その一言に、元島は確実に反応した。

元「な、何のことだよ……」

そう言う元島に、田代は元島の顔を見ながら言う。

田「私のお母さん殺しといて、しらばっくれる気ですか？」

そう言う田代をじっと見て、元島は思い出したかのように驚く。

元「お前、あの時のガキ！」

そう言って、少しして「あ…」と漏らして元島は慌てて口を押える。

田「やっぱり、お母さん殺したのあなたですよね？！」

元「ま、待てよ！俺、確かに犬にお前ら襲わせたけど、ちゃんとやめさせたじゃねーか！殺したってなんなんだよ？！」

そう言う元島に、田代は怒りをあらわにして言う。

田「あなたの連れてた犬、狂犬病にかかってたの。それで、お母さんも狂犬病にかかって死んじゃったのよ！！……あなたが殺したも同然じゃない！！」

そう言う田代に、元島はそっぽを向いて、先ほどよりも落ち着いた声で言う。

元「じゃあなんだよ？今から警察に通報するってか？」

そんな元島に、田代は自嘲気味に笑って言う。

田「前も同じようなこと言ってましたね。それで、通報したら死ぬぞって脅してきて……」

元「あん？そうだっけ？だったら今回も同じこと言ってやろうか―」

田「私、殺されても構いませんから。」

元島の言葉を遮ってそう言う田代に、元島は少し驚いた。

田「たった１人の肉親殺されて、もう私が死んでも悲しむ人もいないし……」

その言葉を聞いた元島は、しばらくの無言の後に悪賢そうに口元をあげた。

元「だったら、お前の大学の人間、あん時みたいに犬使って闇討ちしてやろうか？」

田「え…？」

いきなりの言葉に、田代は驚く。

元「お前が死んで誰も悲しまないならさ、誰か殺してお前を悲しませてやるって言ってんだよ。……どーせ捕まるんでも、お前だけ殺すより、もっと面白いことした方がマシだしよ！」

元島の言葉に、田代は何も言い返せない。

元「この前、お前村岡と大学の話してただろ。だから知ってんだぜ？お前がどこの大学で何習ってるか。」

そう言って、元島は一気に勝ち誇ったような顔をする。

元「俺の事通報しようと思ってたんなら、あれはうかつだったんじゃね？……まあ、お前って仕事でも結構抜けてるし、しゃあねえか！」

そう言って、元島は何か思いついたように言う。

元「そうだ。お前、毎月１０万よこせよ？」

田「じゅ、１０万円？！どうして？！」

元「払えないってんなら、闇討ち、実行するぞ？」

田「！」

元「いくら大学生っつったって、それくらいならあるだろ？……本当はもっと欲しいところだが、１０万で勘弁してやるって言ってんだよ。優しいだろ？」

田「……」

元「おい、どうすんだ？」

田「……払ったら、誰も襲ったりしませんか？」

うつむいたままそう言う田代を見て、元島は嬉しそうに話し出す。

元「いやぁ、お前があん時のガキだってわかった時はヒヤヒヤしたけどよ、コイツはいい金蔓ができちまったなぁ！……頼んだぜ、金蔓ちゃん？」

そう言って田代の肩を叩く元島だったが、田代はそれに対して答えることも、顔を上げることもなかった。―

田「あれ以来、あの男は毎月のように私からお金を巻き上げていった。…でも、自分の稼ぎでは限界なんかすぐに来て、それでも払わないと私の知り合いを闇討ちするって言うから、もう、母さんが残してくれたお金に手を出すしかなかった……でも、お母さんが残してくれた大事なお金をあんな奴のために使うなんて、我慢できるはずないじゃない！だから、もう殺すしかないと思ったのよ……！あの男と同じ手を使って、あの時とは違って息の根を止めてやろうって！」

涙を目にためながらそう叫ぶ田代に、まるで同情するようにレンタが小さく鳴いた。

田「レンタ……」

その様子を見て、修丸が訊く。

修「その子、田代さんの犬なんですか？」

田「もともとは違うわ。あの男がコンビニでバイトをする前にここでやっていた犬のしつけ代理店がつぶれた時に店に残されていた犬の１匹よ。」

晶「じゃあ、元島がドッグトレーナーだったことは知ってて？」

田「あの男にお母さんの話をした後、アイツが今まで何をしていたかを調べていたらあの店の事を知ってね、しかもそこに残されていた犬たちを保護して里親を探している慈善団体があることもわかって、どうせならアイツにひどい目にあわされた犬を使ってやろうと思って引き取ったの。犬笛の使い方も訓練の仕方も、全部独学だったからうまくいくかわからなかったけど、この子、全部ちゃんと覚えてくれたわ。あの男の犬だったなんて思えないくらい、物覚えのいい子なんだから……」

そう言いながら、田代はレンタの頭をなでてやる。するとレンタは嬉しそうに小さく鳴く。

ケ「なるほどな、口裂け男の出現理由は、怪人物は男だという噂を広げるだけでなく、元島同様に通行人を使って練習をしていたと言う訳か。」

そう言われて、田代は少しムッとする。

田「あんな奴と一緒にしないで！私は、誰も傷つけてはいないわ……あの男以外は絶対に傷つけないようにしたもの！」

ケ「寝言は寝て言え。」

田「え…？」

ケ「お前と元島が違うだと？フン…死んだ人間が誰かなんて関係ねぇ。だけどな、教えられることの意味も知らずに、ただ純粋に主人を慕っているだけの犬を殺人の道具にしたお前と元島に、何の違いがあると言うんだ。」

その一言に、田代は目にためていた涙がついにあふれ出した。そして、主人がなぜ泣いているのかもわからないレンタは、ただ困ったようにその涙を嘗めている。

ケ「人を殺して仇を討つ？笑わせるな。お前のしたことは、信じていた主人に道具にされ、裏切られた哀れな犬を生み出しただけだ。」

追い打ちをかけるようにそう言うケンイチに、田代は涙を流したまま静かに立ちあがりながら言う。

田「そうよね……レンタは何にも悪くないのに、私の事こんなにも信じてくれているのに……私、結局はあの男と同じことをしちゃっただけだったのね……」

そう言って、田代はレンタをその場に残し、静かに将通のもとへと歩き出した。その行為に、レンタは寂しそうに一声鳴く。

将「……署まで、同行願おうか。」

静かにそう言う将通に、田代はうなずいた。

そして、将通と田代は店の外へ出ようと歩き始めたが、ふと田代は立ち止まり、部員たちに背中を向けたまま言った。

田「ねえ……君、なんていうの？」

田代の言う「君」と言うのが誰の事なのか、その場にいる全員がそれを理解していた。

ケ「オレは、神童ケンイチだ。……その小せえ脳みその隅にでも入れておけ。」

その一言に、声は出さずとも何より驚いていたのは陽だった。

田「ケンイチくん……もっと早く口裂け男とあなたが出会ってたなら、元島を殺す前に私の正体、気づいてくれてたのかなぁ……」

背中越しにもわかる、それは涙声だった。

ケ「フン…寝言は寝て言えと言ったはずだ。いつ出会っていようと、お前のその心の弱さがある限り、その犬は殺人の道具と化していた。それは事実だ。」

田「そっか……」

涙声のままの田代に、ケンイチは再び口を開く。

ケ「だが、犬と言うのはお前が思っているよりもずっと賢い動物だ。本当に弱い人間に、ここまで信頼を寄せることはしないだろう……」

田「！」

その一言に、田代は驚き、そしてたまっていた涙を一気に流した。

ケ「忘れるな。この犬は、お前の苦しみを共に背負った、お前の友だ。決して道具なんかじゃねえ。」

陽「ケンイチくん……」

ケンイチの話を聞いて、陽は哀しそうに、しかしもっともそうにつぶやいた。

田「わかってる……わかってるわ、そんなこと……」

小さくそう言って、田代はまた歩き始めた。部員たちは、その背中をただただ見送るだけだった。

路地がうす暗くなるころ、陽とケンイチは家に向かって歩いていた。

ケ「宗光……」

今まで黙っていたケンイチが急に口を開く。陽は少し驚いたものの、すぐにやさしい口調で聞き返す。

陽「なあに？」

ケ「お前は何に驚いた。」

陽「え？」

ケ「田代がオレの名を聞いてきた時、お前はひどく驚いていた。何に驚いたんだ。」

陽「……その名前、ケンイチって名前、受け入れてくれたんだなぁって思って。」

その答えに、ケンイチはほぼ無表情ともいえるような顔で陽の方を向く。

陽「あなたのことをケンイチくんって呼んでも、ヨシくんの名前で呼ばれていた時みたいに嫌がらないではくれてたけど、でも、なんだか、仕方なしに何も言わないのかなって思ってたから……」

そう言う陽は、とても心配そうな顔をしていた。

ケ「くだらないことで悩みやがって……」

陽「だって……」

ケ「オレはこうして存在する。だが、賢一でもねえ。……だったら、名前を持たねーとややこしい。そんなことを最初に言ったのはお前だろうが。」

そう言うケンイチに、陽は少し懐かしそうに話し始める。

陽「前に、名前なんて必要ないって言ってたよね？……今はもう、そんなこと思ってないんだよね？だから自分の名前を―」

陽が話している最中、ケンイチは急に早足になって陽を追い越した。

陽「あ、待って……」

陽のその言葉でケンイチは立ち止まった。

陽「もう、置いてかないでよ……」

そう言って陽がケンイチの肩に手を置くと、それに気付いて振り向いたのは……

賢「ゴメン……」

その顔を見て、陽は驚くよりも嬉しそうに微笑んだ。

陽「……。おかえり、ヨシくん。」

そう言う陽に、賢一は少しくすぐったそうに胸に手を当てて言う。

賢「ケンイチ、恥ずかしそうだったよ？」

陽「え？」

賢「名前、やっぱり気に入ってくれてるみたい。なんか、照れてるとこを見られたくなくて、急に戻っちゃったみたい。」

そう言って微笑む賢一に、陽も嬉しそうに微笑んだ。

陽「そう……」

陽（Ｍ）「ケンイチくんが何者なのか、まったくわからないまま。また、事件を解決してヨシくんの中に戻っていった……でも、今回は彼とヨシくんの共通点を見つけれた気がする。ヨシくんやみんなを守るために咄嗟に出てきてくれたり、田代さんを最後には言葉で救ってあげたり……そして、私のあげた名前を捨てないでいてくれたり……形は違うけれど、２人とも、誰にも負けない優しさを持っているって共通点を……」

晶「引き取ったぁ？！」

数日後、メディア部の部室に響き渡るような声でそう言う晶に、いつも以上に修丸がビビリ上がっている。

修「あ！いえ！その！」

孝「事実に対して、何が「いえ！」だよ……」

修「いや、だってぇ……」

半泣きでそう言う修丸だったが、それを見て罪悪感を覚えたのか、少し口調を柔らかくして晶が聞きなおす。

晶「で、あの犬引き取ったって本当なのか？」

修「あ、はい。なんだかレンタがどうなったのか、あれからずっと気になっちゃって、孝彦くんに訊いたら、引き取ってくれる慈善団体か里親を探してるっていうから……」

孝「しかもコイツ、田代さんが刑期終えて出てきて、犬を飼う余裕があるようだったら、レンタを彼女のもとに帰してあげたいって言うんだぜ？」

修「レンタ、田代さんの事が大好きなはずですからね、だったら今回の事件を知っている人が預かった方がいいのかなって思いまして。前々から犬を飼おうか？って話も家族で出てましたし！」

隆「だからって、まさか修丸が引き取るとはなぁ。」

意外そうにそう言う隆平に、修丸は少し怪訝そうに言う。

修「どーいう意味ですか？それ！」

隆「別にぃ……」

路「で、しつけはできそうか？」

修「いえ、まだ全然懐いてくれないし、トイレとかも覚えなくて……やっぱり飼い主が変わって、レンタも大変みたいで。」

海「あれ？でもレンタってすごく物覚えがいい、みたいなこと、田代さん言ってませんでした？」

路「言ってた、言ってた。」

隆「ってことは、修丸のしつけが悪いってことか！」

孝「いや、しつけ以前に人としての威厳の問題だな、こりゃ。」

晶「ソイツは言えてるな！」

晶の一言に、部員たちはみんな笑いだす。

修「ちょっとぉ～！……みんなしてひどいです（泣）」

そんな中、大笑いではなく苦笑気味の賢一と陽は、いつものようにこそこそと話し合っている。

賢「センパイ、なんかかわいそう…（汗）」

陽「でも、威厳の問題ってのはその通りな気もするけど。」

そう言い合ってから、２人は顔を見合わせておかしそうに笑いだす。

修「あ～、賢一くんに陽さんまで～（泣）」

そう言われながらも、２人は笑いをこらえられない。

陽（Ｍ）「こんなこともあって、レンタの事も含め口裂け男の事件は解決しました。……私たちがこうして笑っていられるのも、こうしていつもと同じ、ヨシくんの笑顔が見られるのも、きっとケンイチくんが事件を解決してくれたから。その事実があるのなら、彼の正体なんてわからなくてもいい。名前を、自分の存在を受け入れてくれただけでいい……少なくとも今はそう思えます。」